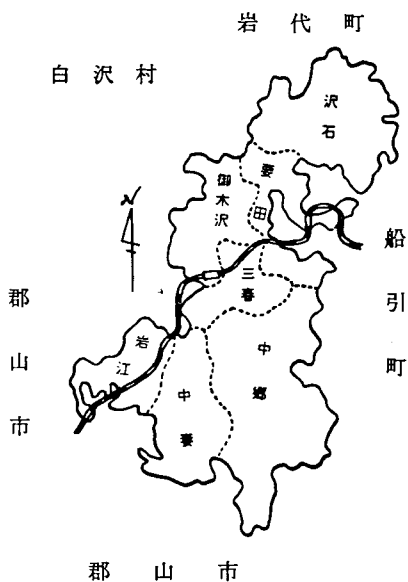


三春町における医療・保健問題

伊 部 正 之

はじめに

- 一 人口動態に関する若干の特徴
- 二 死亡原因にみる地域的特徴
- 三 疾病動向についての若干の検討
- 四 医療・保健の供給体制と行政



三春町(みはるまち)福島県の田村郡北西部、阿武隈山地の中部西端に位置する町。面積七三平方キロ・メートル。人口一八、八五九人(一九七五年国勢調査)。一九五五(昭三〇)年四月(旧)三春町と御木沢(おぎさわ)、中妻(なかつま)、沢石(さわいし)、要田(かなめだ)、中郷(なかさと)五村が合併し、さらに同年一月に岩江(いわえ)村の一部を合併して、現在の町域がほぼ確定した。町名はウメ、モモ、サクラの花が一度に咲くことに由来する。中心集落の三春は近世、秋田氏五万石の城下町。町域の多くは丘陵地帯で、水稻のほかタバコ栽培、養蚕、畜産があり、近年では農村工業の導入もみられる。また、かつての田村郡都としての機能を漸次失ないつつ、郡山市への依存傾向を強めている。

はじめに

周知のように、三春町は阿武隈山系の西端部に位置する。したがって、町域の大部分は起伏に富んだ丘陵地帯をなしており、そのことが、町の主要産業である農業の構造（耕地および作目の編成）を規定していることと相まって、住民の健康問題にも大きく作用している。また、「高度成長」期以来の社会経済情勢の急速な変化がこうした農村社会にもたらした労働・生活様式の変容も、住民の健康問題に少なからず意味をもっているはずである。

本稿は、一九七七年に福島大学地域開発研究会が行なった三春町総合調査の一環として、筆者が分担した医療・保健問題についての報告である。

なお、分析にあたって筆者が依拠したのは主として三春町民生課、福島県厚生部および福島県国民健康保険団体連合会等の資料である。ところが、前二者の資料については、集計方法等のちがいによって、データにかなりの不一致がみられる。したがって、筆者としては、町内とくに地区別の比較分析には町資料を利用し、町と田村郡（本稿では全て現有七町村の領域に統一調整している）、福島県、全国とを比較する場合には県資料を利用したが、あえて両資料の統一・接合をはかることはしなかった。また、今回の掲載にあたって、資料の補充とそれに伴う文章上の補訂を行なった。これらの点をあらかじめお断りしておかねばならない。

一 人口動態に関する若干の特徴

直接に住民の健康問題をみるまえに、それとの関連で検討の対象となる住民の量的規模とその変化、すなわち人口動態から簡単にみておこう。

年次	中郷			中妻			岩江			三春町(計)		
	人口	構成比	指数	人口	構成比	指数	人口	構成比	指数	人口	構成比	指数
昭和35年	3,341	15.1	108.4	1,896	8.6	109.3	1,591	7.2	106.4	22,119	100.0(103.9)	
36	3,310	15.1	107.4	1,885	8.6	108.6	1,589	7.2	106.3	21,972	100.0(103.2)	
37	3,247	14.9	105.4	1,872	8.6	107.9	1,569	7.2	104.9	21,781	100.0(102.3)	
38	3,160	14.8	102.6	1,842	8.6	106.2	1,552	7.3	103.8	21,365	100.0(100.4)	
39	3,129	14.6	101.6	1,789	8.3	103.1	1,519	7.1	101.6	21,482	100.0(100.9)	
40	3,081	14.5	100.0	1,735	8.2	100.0	1,495	7.0	100.0	21,283	100.0(100.0)	
41	2,996	14.2	97.2	1,682	8.0	96.9	1,484	7.1	99.3	21,038	100.0(98.8)	
42	2,940	14.2	95.4	1,644	7.9	94.8	1,483	7.1	99.2	20,760	100.0(97.5)	
43	2,929	14.3	95.1	1,597	7.8	92.0	1,450	7.1	97.0	20,448	100.0(96.1)	
44	2,893	14.4	93.9	1,571	7.9	90.5	1,430	7.1	95.7	20,110	100.0(94.5)	
45	2,885	14.5	93.6	1,566	7.9	90.3	1,430	7.2	95.7	19,927	100.0(93.6)	
46	2,759	14.1	89.5	1,500	7.7	86.5	1,447	7.4	96.8	19,539	100.0(91.8)	
47	2,704	14.1	87.8	1,459	7.6	84.1	1,453	7.6	97.2	19,159	100.0(90.0)	
48	2,638	13.9	85.6	1,433	7.6	82.6	1,466	7.7	98.1	18,921	100.0(88.9)	
49	2,671	14.2	86.7	1,428	7.6	82.3	1,487	7.9	99.5	18,806	100.0(88.4)	
50	2,729	14.5	88.6	1,420	7.5	81.8	1,553	8.3	103.9	18,852	100.0(88.5)	
51	2,710	14.4	88.0	1,442	7.7	83.1	1,699	9.0	113.6	18,847	100.0(88.6)	
52	2,726	14.4	88.5	1,455	7.7	83.9	1,780	9.4	119.1	18,912	100.0(88.9)	
53	2,703	14.3	87.3	1,457	7.7	84.0	1,903	10.1	127.3	18,913	100.0(88.9)	
54年平均	3,185.4	14.8		1,824.6	8.4		1,544.8	7.2		21,576.6	100.0	
36~40	2,928.6	14.3		1,612.0	7.9		1,455.4	7.1		20,456.6	100.0	
41~45	2,700.2	14.2		1,448.0	7.6		1,481.2	7.8		19,051.4	100.0	

(資料) 三春町民生課資料より作成。
 (注) ①「構成比」は全町人口(計の欄)にいたする割合(%)である。
 ②「指数」は各昭和40年中央人口を100とした場合の各年中央人口の割合。ただし、栗田地区について35~38年分をカッコに入れたのは、38年9月に栗田地区が楢大(船引町から旧栗田村の一部を編入)したため、この間の人口を40年と単純比較できないためである。それはしたがって「計」についての相当欄にもあてはまる。

第2表 地区別人口の増減

年次	三			春			沢			石			要			田			御			木			沢		
	自然増	社会増	計	増加率(%)	自然増	社会増	計	増加率(%)	自然増	社会増	計	増加率(%)	自然増	社会増	計	増加率(%)	自然増	社会増	計	増加率(%)	自然増	社会増	計	増加率(%)			
昭和36年	58	147	89	(△0.96)	32	41	9	(△0.38)	26	26	0	34	39	5	(△0.22)	11	11	6	(△0.35)	11	32	21	(△0.96)	19	32	51	(△1.44)
37	67	153	86	(△0.94)	15	19	4	(△0.17)	9	11	2	23	26	3	(△0.13)	12	12	7	(△0.41)	9	52	43	(△1.99)	19	52	71	(△1.99)
38	49	110	61	(△0.67)	14	124	110	(△4.73)	16	54	38	27	100	73	(△3.17)	13	13	4	(0.64)	7	57	50	(△2.36)	12	57	74	(△1.07)
39	56	130	74	(△0.82)	32	52	20	(△0.90)	0	360	360	15	51	32	(△1.44)	14	14	23	(△1.68)	15	37	22	(△1.07)	13	37	68	(△1.07)
40	33	56	23	(△0.26)	22	82	60	(△2.73)	2	26	28	16	34	18	(△0.82)	11	11	0	(1.66)	16	52	39	(△1.91)	13	52	60	(△1.91)
41	44	159	115	(△1.29)	6	28	34	(1.59)	2	4	6	11	32	21	(△0.96)	14	14	7	(△0.41)	9	52	43	(△1.99)	15	52	71	(△1.99)
42	71	163	92	(△1.04)	14	55	41	(△1.89)	12	19	4	11	32	21	(△0.96)	14	14	11	(0.64)	7	57	50	(△2.36)	15	57	74	(△1.07)
43	74	232	158	(△1.81)	0	24	24	(△2.09)	6	23	0	15	37	22	(△1.07)	10	10	29	(△1.68)	15	37	22	(△1.07)	15	37	68	(△1.07)
44	68	229	161	(△1.88)	8	52	44	(△2.71)	6	6	0	13	52	39	(△1.91)	11	11	0	(2.71)	6	52	39	(△1.91)	13	52	60	(△1.91)
45	45	135	75	(△0.89)	4	60	56	(△2.71)	6	6	6	13	52	39	(△1.91)	11	11	0	(2.71)	6	52	39	(△1.91)	13	52	60	(△1.91)
46	65	247	182	(△2.18)	9	120	111	(△5.53)	10	23	27	12	95	107	(△5.34)	10	10	27	(1.59)	12	32	21	(△0.96)	12	32	65	(△0.96)
47	84	297	213	(△2.61)	14	41	27	(△1.42)	10	35	25	13	38	25	(△1.88)	13	13	25	(1.50)	13	52	43	(△1.99)	13	52	84	(△1.99)
48	68	205	137	(△1.72)	13	28	15	(△0.80)	4	18	46	13	26	39	(△1.87)	14	14	46	(2.80)	13	26	39	(△1.87)	13	26	68	(△1.87)
49	75	202	127	(△1.63)	14	26	12	(△0.65)	6	18	12	17	30	13	(△0.61)	14	14	12	(0.75)	17	30	13	(△0.61)	17	30	75	(△0.61)
50	34	36	2	(△0.03)	14	13	1	(0.05)	1	36	37	21	73	52	(△2.46)	1	1	37	(2.35)	21	52	39	(△2.46)	21	52	34	(△2.46)
51	54	189	135	(△1.76)	7	72	65	(△3.53)	1	38	37	12	17	29	(△1.41)	1	1	37	(2.39)	12	32	21	(△0.96)	12	32	54	(△0.96)
52	39	62	23	(△0.30)	19	30	11	(△0.62)	14	28	13	21	20	1	(△0.05)	14	14	12	(0.76)	21	37	21	(△0.05)	21	37	39	(△0.05)
53	53	77	77	(△1.02)	19	30	12	(△0.68)	14	28	13	21	20	1	(△0.05)	14	14	12	(0.83)	21	37	21	(△0.05)	21	37	53	(△0.05)
57年平均	52.6	119.2	66.6	(△0.74)	23.0	63.6	40.6	(△1.81)	10.6	59.0	69.6	23.8	50.0	26.2	(△1.17)	10.6	10.6	29.4	(4.67)	23.8	32	21	(△1.17)	23.8	50.0	41	(△1.17)
36~40	63.4	183.6	120.2	(△1.40)	6.4	32.6	26.2	(△1.25)	4.2	8.0	3.8	11.0	46.0	35.0	(△1.69)	4.2	4.2	29.4	(0.22)	11.0	46.0	35.0	(△1.69)	11.0	46.0	41	(△1.69)
41~45	65.2	197.4	132.2	(△1.68)	12.8	45.6	32.8	(△1.76)	3.0	32.4	29.4	15.2	4.0	11.2	(△0.53)	3.0	3.0	29.4	(1.83)	15.2	4.0	11.2	(△0.53)	15.2	4.0	46	(△0.53)

年次	中			郷			中			妻			岩			江			三春町(計)			
	自然増	社会増	計	自然増	社会増	計	自然増	社会増	計	自然増	社会増	計	自然増	社会増	計	自然増	社会増	計	自然増	社会増	計	増加率(%)
昭和36年	16	47	31	10	21	11	17	19	2	193	340	147	193	340	147	193	340	147	193	340	147	(△0.66)
37	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	(△0.87)
38	15	102	87	15	45	30	17	35	17	173	364	191	154	570	154	570	154	154	570	154	191	(△1.91)
39	27	58	31	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	(△0.55)
40	41	89	48	(△1.53)	48	54	19	44	24	125	324	199	125	324	125	324	125	125	324	125	199	(△0.93)
41	25	110	85	(△2.76)	10	63	11	22	11	109	354	245	109	354	109	354	109	109	354	109	245	(△1.15)
42	19	75	56	(△1.87)	2	40	38	14	1	140	418	278	140	418	140	418	140	140	418	140	278	(△1.13)
43	26	37	11	(△0.39)	2	49	47	47	33	130	442	312	130	442	130	442	130	130	442	130	312	(△1.50)
44	25	61	36	(△1.23)	6	32	5	20	0	116	454	338	116	454	116	454	116	116	454	116	338	(△1.65)
45	12	20	8	(△0.28)	7	5	6	6	0	108	291	183	108	291	108	291	108	108	291	108	183	(△0.91)
46	17	143	126	(△4.37)	△2	64	66	10	17	104	492	388	104	492	104	492	104	104	492	104	388	(△1.95)
47	0	55	55	(△1.99)	10	41	41	3	6	140	520	380	140	520	140	520	140	140	520	140	380	(△1.94)
48	7	73	66	(△2.44)	11	37	26	11	13	118	356	238	118	356	118	356	118	118	356	118	238	(△1.24)
49	16	17	33	(△1.25)	12	17	5	13	21	148	263	115	148	263	148	263	148	148	263	148	115	(△0.61)
50	15	43	58	(△2.17)	5	13	8	53	66	101	75	26	101	75	101	75	101	101	75	101	26	(△0.14)
51	14	33	19	(△0.70)	21	1	22	136	146	117	102	15	117	102	117	102	117	117	102	117	15	(△0.08)
52	33	17	16	(△0.59)	15	2	13	68	81	154	89	65	81	154	81	154	81	81	154	81	65	(△0.34)
53	△	△	23	(△0.84)	△	△	2	123	123	123	1	1	123	123	123	123	123	123	123	123	1	(△0.01)
5カ年平均	27.0	79.0	52.0	(△1.53)	6.2	38.4	32.2	16.4	19.2	159.6	326.8	167.2	159.6	326.8	159.6	326.8	159.6	159.6	326.8	159.6	167.2	(△0.77)
36~40	41.4	60.6	39.2	(△1.34)	5.4	39.2	33.8	8.8	13.0	120.6	391.8	271.2	120.6	391.8	120.6	391.8	120.6	120.6	391.8	120.6	271.2	(△1.33)
41~45	11.0	42.2	31.2	(△1.16)	7.2	36.4	29.2	7.8	24.6	122.2	341.2	219.0	122.2	341.2	122.2	341.2	122.2	122.2	341.2	122.2	219.0	(△1.15)

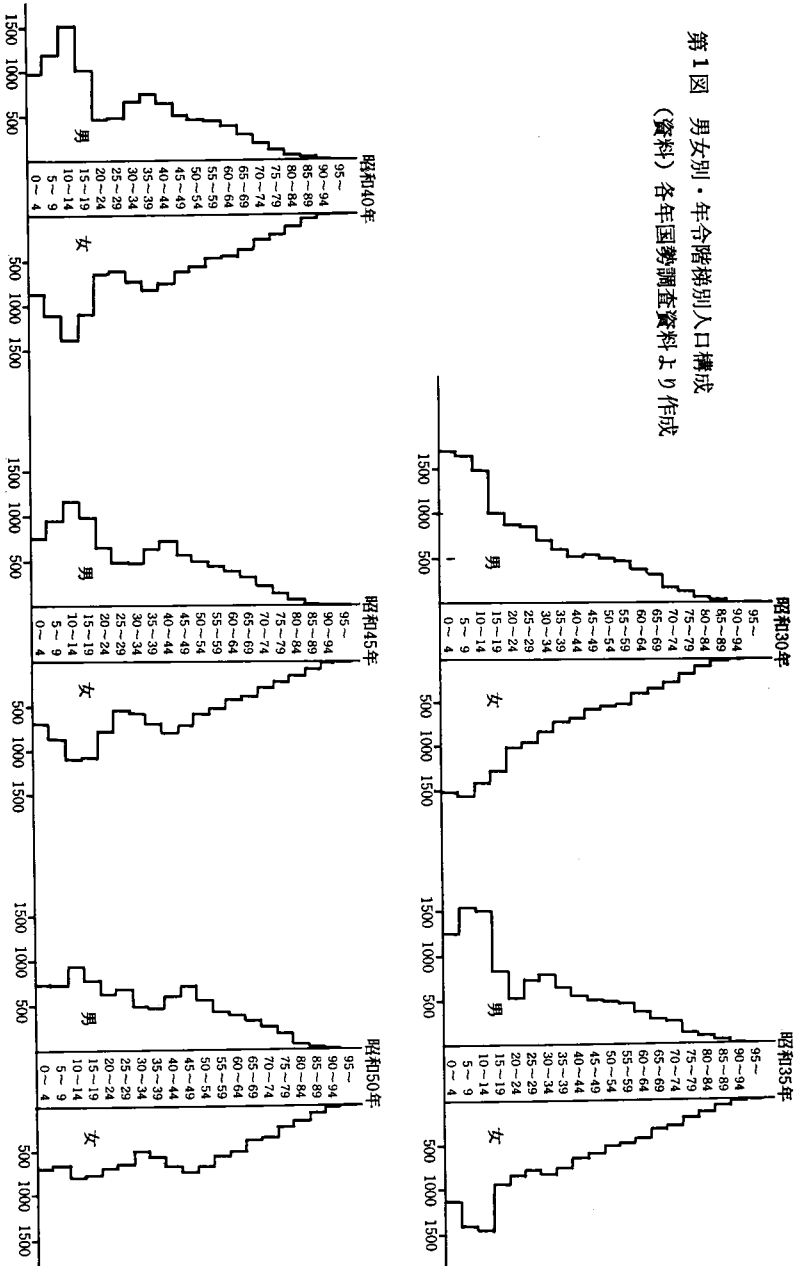
(資料) 三春町民生課資料より作成。
 ①「自然増」は「出生数-死亡数」を暦年単位で算出した。
 ②「社会増」は「転入数-転出数」を暦年単位で算出した。
 ③「計」は前年中央人口にたいする当年中央人口の増減分をもちいて算出した。
 ④「増加率」は前年中央人口にたいする計(つまり増減分)の割合とした。
 ⑤「5カ年平均」は自然増・社会増・計の各平均値を求め、さらに平均中央人口にたいする計の比率として増加率を算出した。

第1表は三春町における昭和三五年以来の地区別年央人口とその変化をみたものである。三八年九月における一部要田地区の編入による例外的な事情を別にすれば、町全体としては、四〇年代末まで一貫した人口の漸減傾向がつづき、四十年代の十年間をとってみても、四〇年にたいする五〇年の比較では、二、四五一人（一一・五%）の減少となっている。また、第1表および第2表からも明らかのように、この間の人口減少率は中心市街地である三春と、そこからもっとも離れた沢石および中妻でとりわけ大きかったことがわかる。その結果、三春地区の人口比はついに四〇%を割るに至っている。

そこで、全体としてこのような人口減少傾向は当然の社会経済的要因によるはずであるが、その分析は三春町の産業経済等を扱うべき別の報告に関連するはずなので、ここではさしあたり年齢別人口構成の変化をみることで、人口減少の姿を確認することにとどめよう。第1図は昭和三〇年以來の国勢調査時点における年齢階梯別人口構成（人口ピラミッド）である。三〇年段階では、戦争など若干の攪乱要因を別にすれば、一〇代後半男子の流出があるほかは、ほとんど全く見事なピラミッド型を形成していた。それが三五年段階になると、一〇代後半女子も大量に流出するようになり、その結果二〇代の人口も停滞し、さらに出生数Ⅱ幼児人口の減少も生じてきた。かくして四〇年段階では、二〇代をくびれとするひょうたん型に移行し、子供世代の減少（世代人口の縮小再生産）も進行した。さらに四五年段階ではくびれの年齢階梯が上昇し、かくして五〇年段階にはほぼ釣鐘型への移行を完了するに至っている。ただし、こうした人口ピラミッドの変容過程自体は、日本全体についてとほぼ同様のものである。

そして、この間の関係を今一度第3表の年齢階梯別人口構成比によつてみるならば、新規卒者の流出および出生数減少の波及効果がよみとれるし、同時に年齢構成比の平準化傾向もよみとれるであろう。また、第3表下段および第2図にみるように、生産年齢人口（一五〜六四才）が停滞的であったのにたいし、年少人口（一四才以下）は半減し、老年人口

第1図 男女別・年齢階梯別人口構成
 (資料) 各年国勢調査資料より作成



第3表 年齢階梯別人口構成

(各10月1日国勢調査)

年齢	昭和30年				昭和35年				昭和40年	
	男	女	計	(%)	男	女	計	(%)	男	女
95~99	1	0	1	0.00	0	1	1	0.00	0	1
90~94	0	2	2	0.01	0	7	7	0.03	6	8
85~89	14	20	34	0.14	18	32	50	0.23	18	35
80~84	43	82	125	0.52	51	91	142	0.64	43	118
75~79	114	157	271	1.11	103	181	284	1.28	135	203
70~74	168	261	429	1.76	231	265	496	2.24	196	278
65~69	309	329	638	2.62	275	317	592	2.68	291	370
60~64	361	393	754	3.09	349	425	774	3.50	393	463
55~59	430	504	934	3.83	437	484	921	4.16	425	477
50~54	487	539	1,026	4.21	460	505	969	4.38	454	570
45~49	522	563	1,085	4.45	483	598	1,081	4.89	508	610
40~44	511	682	1,193	4.89	522	635	1,157	5.23	615	732
35~39	598	711	1,309	5.37	622	763	1,385	6.26	768	812
30~34	681	829	1,510	6.19	767	820	1,587	7.17	676	718
25~29	840	947	1,787	7.33	713	777	1,490	6.74	487	625
20~24	849	999	1,848	7.58	503	809	1,312	5.93	480	633
15~19	990	1,263	2,253	9.24	796	906	1,702	7.69	1,026	1,083
10~14	1,462	1,401	2,863	11.74	1,476	1,446	2,922	13.21	1,527	1,370
5~9	1,627	1,527	3,154	12.93	1,519	1,391	2,910	13.16	1,194	1,104
0~4	1,658	1,514	3,172	13.01	1,204	1,133	2,337	10.57	977	863
計	11,665	12,723	24,388	100.0	10,529	11,590	22,119	100.0	10,219	11,073
65以上	649	851	1,500	6.15	678	894	1,572	7.11	689	1,013
15~64	6,269	7,430	13,699	56.17	5,652	6,726	12,378	55.96	5,832	6,723
0~14	4,747	4,442	9,189	37.68	4,199	3,970	8,169	36.93	3,698	3,337

年齢	昭和40年		昭和45年		昭和50年					
	計	(%)	男	女	計	(%)	男	女	計	(%)
95~99	1	0.00	2	1	3	0.02	0	1	1	0.01
90~94	14	0.07	5	7	12	0.06	3	12	15	0.08
85~89	53	0.25	10	53	63	0.32	30	69	99	0.52
80~84	161	0.76	63	136	199	1.00	72	142	214	1.13
75~79	338	1.59	121	218	339	1.70	164	233	397	2.11
70~74	474	2.27	226	301	527	2.65	268	350	618	3.28
65~69	661	3.10	345	407	752	3.78	331	391	722	3.83
60~64	856	4.02	383	429	812	4.08	385	498	883	4.68
55~59	902	4.24	414	524	938	4.71	439	557	996	5.28
50~54	1,024	4.81	472	581	1,053	5.29	551	681	1,232	6.53
45~49	1,118	5.25	586	709	1,295	6.51	720	753	1,473	7.82
40~44	1,347	6.37	725	782	1,507	7.57	622	672	1,294	6.86
35~39	1,580	7.42	635	687	1,322	6.64	481	589	1,070	5.67
30~34	1,394	6.55	491	585	1,076	5.41	504	501	1,005	5.33
25~29	1,112	5.22	494	528	1,022	5.14	663	646	1,309	6.94
20~24	1,113	5.23	640	783	1,423	7.15	617	690	1,307	6.93
15~19	2,109	9.91	993	1,052	2,045	10.28	792	782	1,574	8.35
10~14	2,897	13.61	1,163	1,083	2,246	11.29	952	819	1,771	9.39
5~9	2,298	10.79	964	838	1,802	9.06	736	695	1,431	7.59
0~4	1,840	8.64	772	690	1,462	7.35	737	711	1,448	7.68
計	21,292	100.0	9,504	10,394	19,898	100.0	9,067	9,792	18,859	100.0
65以上	1,702	7.99	772	1,123	1,895	9.52	868	1,198	2,066	10.95
15~64	12,555	58.97	5,833	6,660	12,493	62.79	5,774	6,369	12,143	64.39
0~14	7,035	33.04	2,899	2,611	5,510	27.69	2,425	2,225	4,650	24.66

―三春町における医療・保健問題―

一〇

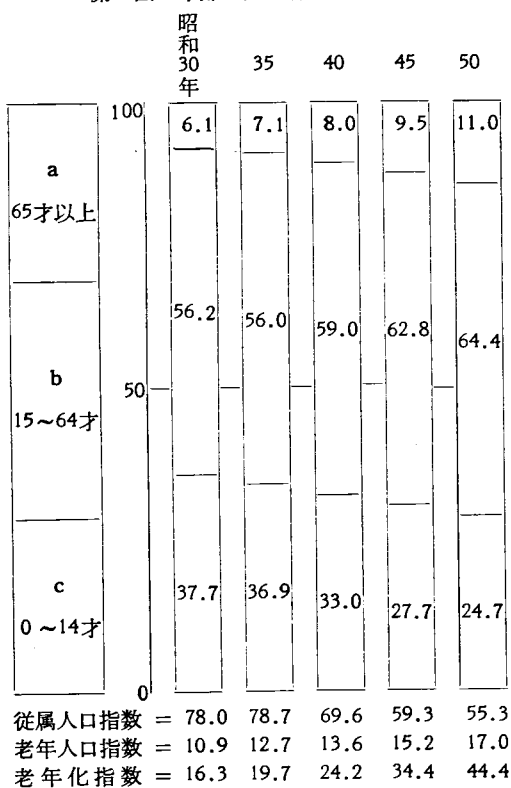
(資料) 国勢調査資料より作成。

(注) 老年人口=65才以上

生産年齢人口=15~65才

年少人口=0~14才

第2図 年齢3区分別人口割合



(資料) 第3表より作成。

(注) ① 従属人口指数 = $\frac{a+c}{b} \times 100$

② 老年人口指数 = $\frac{a}{b} \times 100$

③ 老年化指数 = $\frac{a}{c} \times 100$

(六五才以上)は着実に増加している。その結果、生産年齢人口比の増大、したがって従属人口指数の低下が進行してきたことがわかる。同時に、将来人口の一層の老齢化を予想させる老年人口指数の着実な上昇や、老年化指数の急速な上昇も認められる。そして、こうした傾向自体は全国的傾向と同様であるが、全国平均と比較して、三春町の場合には生産年齢人口比および老年人口比においてつねに高く、年少人口比においてつねに低く推移してきている。これは三春町がこの間一貫した人口流出地域として、人口の高齢化傾向を示してきたことの結果にほかならない。

しかし、四〇年代後半からは、郡山市に隣接する岩江地区が人口の増加に転じている。これはこの地区が通勤者用の住宅地となりつつあることの結果である。また、その他の地区についても、近年その人口減少幅の縮小ないしは若干の人口増加がみられ、したがって、町全体についても人口の微増が記録されるに至っている。こうした人口の下げ止まり現象は、いわゆる「過疎」化地域にみられる全国的におよそ共通した現象でもあるが、おそらくは、①釣

鐘型人口構成への移行

第4表 出生数・出生率の全体比較

年次	全 国		福 島 県		田 村 郡		三 春 町	
	数	率	数	率	数	率	数	率
昭和35年	1,606,041	17.2	39,259	19.1	2,794	24.2	443	20.0
36	1,589,372	16.9	37,091	18.2	2,203	22.5	413	18.8
37	1,618,616	17.0	35,566	17.6	1,965	20.2	421	19.5
38	1,659,521	17.3	34,064	16.9	2,021	21.0	397	18.6
39	1,716,761	17.7	32,989	16.5	1,835	19.2	351	16.3
40	1,823,697	18.6	32,807	16.5	1,775	18.8	343	16.1
41	1,360,974	13.7	24,401	12.5	1,366	14.7	294	14.0
42	1,935,647	19.4	32,778	16.7	1,675	18.2	318	15.3
43	1,871,839	18.6	30,360	15.5	1,469	16.2	313	15.3
44	1,889,815	18.5	29,958	15.3	1,466	16.4	304	15.1
45	1,934,239	18.7	29,952	15.4	1,312	14.9	286	14.4
46	2,000,973	19.2	30,694	15.8	1,272	14.6	271	13.9
47	2,038,682	19.3	31,432	16.3	1,263	14.7	296	15.4
48	2,091,983	19.4	32,440	16.8	1,243	14.7	289	15.3
49	2,029,989	18.6	32,884	16.9	1,242	14.8	304	16.2
50	1,901,440	17.1	31,287	15.9	1,182	14.2	288	15.5
51	1,832,617	16.3	31,581	16.0	1,195	14.4	272	14.4
52	1,755,100	15.5	31,226	15.7	1,225	14.8	292	15.4
5ヵ年平均								
36~40	1,681,593.4	17.5	34,503.4	17.2	1,959.8	20.4	385.0	17.9
41~45	1,798,502.8	17.8	29,489.8	15.0	1,457.6	16.1	303.0	14.8
46~50	2,012,613.4	18.7	31,746.8	16.3	1,240.4	14.6	289.6	15.2

— 三春町における医療・保健問題 —

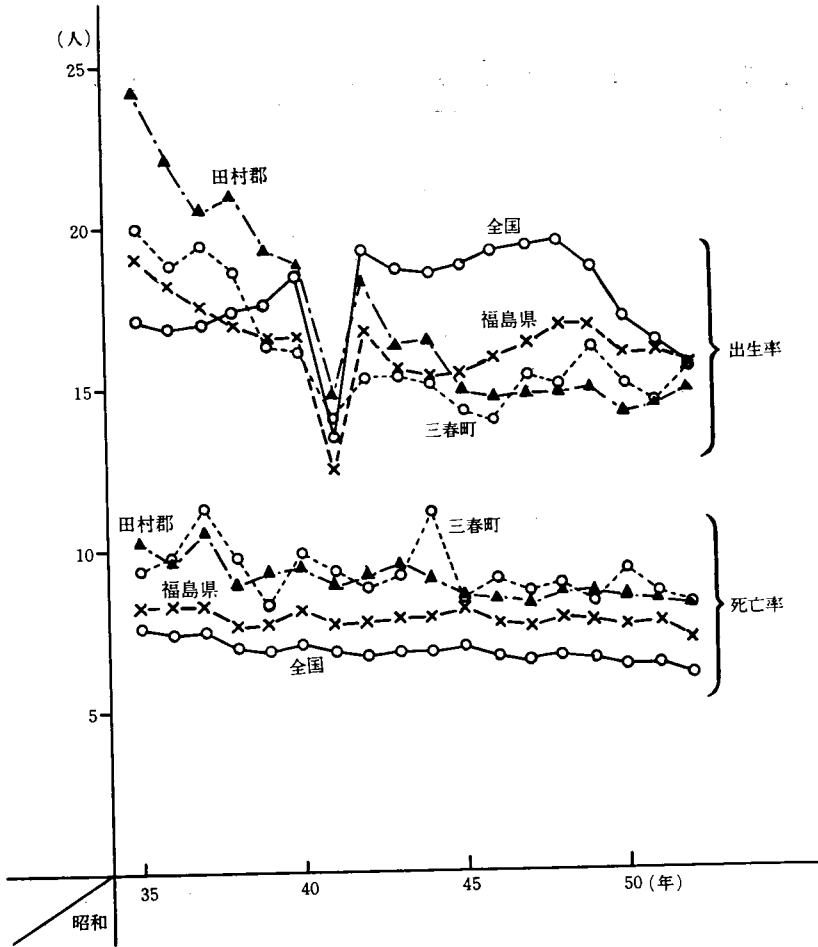
(資料) 昭和51年までは福島県厚生部『厚生行政の概況(衛生編)』(各年版), 昭和52年については厚生省大臣官房統計情報部『昭和52年人口動態統計(年報)概況』(昭和53年9月)および福島県保健環境部『昭和52年人口動態の概況』(昭和53年6月)より作成。

(注) ①「出生率」は年央人口1,000人あたりの出生数である。

②「5ヵ年平均」の場合の「出生率」は平均年央人口1,000人あたりの平均出生数である。

二二

第3図 出生率・死亡率の全体比較



(資料) 第4表(出生率)および第6表(死亡率)より作成。

(注) いずれも年央人口1,000人あたりの数値である。

による人口排出能力の低下、②昨今の「構造不況」による大都市圏での雇用減退、③都市環境の悪化と農村居住の再評価、④モータリゼーションの発達による在村通勤条件の拡大、⑤農村工業導入による在郷企業への勤務者の増大、などによるものと思われる。しかし、岩江地区を別にすれば、社会的人口減少の傾向はまだ終ってはいない（第2表参照）。

そこで次に、全国、福島県、田村郡、三春町および町内地区別の出生率・死亡率について検討してみよう。

第4表および第3図によって全体的な出生率をみると、全国平均では四一年の丙午（ヒノエウマ）を例外として、四〇年代全体が一つの高みを形成している。これは戦後初期のベビー・ブーム期に生まれた世代が成人して、新たなブーム期を形成したものである。これにたいして福島県では、四一年の急落にたいする四二年の反動的上昇を別にすれば、四〇年代後半に弱い上昇期をもちながらも、全体としては停滞的である。こうした「過疎」化を反映する出生動向は田村郡について一層はつきりと現われており、郡山市隣接部の吸収合併による残存田村郡の停滞ぶりがうかがえる。また、この点で三春町は県と郡の中間的存在とみることができると、その結果、三五年当時の郡V町V県V国という出生率序列は、五〇年代階では国V県V町V郡という序列に逆転している。これは、この間の「高度成長」政策と、それがもたらす「過疎」化によるものであることはすでに明らかであろう。また、五〇年代に入って、出生率の全体的な平均化傾向がよみとれる。

三春町における地区別の出生数・出生率は第5表および第4図のとおりである。三〇年代後半には要田、中郷、岩江、沢石、御木沢の順に出生率が高く、三春地区の低さが目立っている。四〇年代前半は、全体として出生率が低下したなかで、要田、中郷が高く、沢石、中郷が低くなっており、また四〇年代後半では沢石の高さと岩江の低さが目についている。かくして、出生率と地区との関連は時期によって必ずしも一貫しないが、全体を通じてみれば、中郷、要田、沢石で高く、三春や近年の岩江で低くなっている。これは、前者が純農村部であり後者が市街地ないしは住宅地化地域であること、そして一般に農村地域は多産型、都市地域は少産型といわれてきたことを、あるいは裏付けるものであるかもしれない。

第6表 死亡数・死亡率の全体比較

年次	全 国		福 島 県		田 村 郡		三 春 町	
	数	率	数	率	数	率	数	率
昭和35年	706,599	7.6	17,044	8.3	1,171	10.2	208	9.4
36	695,644	7.4	16,726	8.3	946	9.6	214	9.8
37	710,265	7.5	16,740	8.3	1,015	10.6	245	11.3
38	670,770	7.0	15,473	7.7	859	8.9	207	9.7
39	673,067	6.9	15,469	7.7	891	9.3	189	8.8
40	700,438	7.1	16,109	8.1	895	9.5	212	10.0
41	670,342	6.8	15,010	7.6	829	8.9	197	9.8
42	675,006	6.8	15,126	7.7	837	9.1	184	8.8
43	686,555	6.8	15,344	7.8	862	9.5	188	9.2
44	693,787	6.8	15,237	7.8	808	9.0	225	11.2
45	684,521	6.9	15,672	8.1	753	8.5	170	8.5
46	683,751	6.6	14,641	7.5	730	8.4	178	9.1
47	709,416	6.5	14,515	7.8	702	8.2	167	8.7
48	710,516	6.6	15,071	7.8	735	8.7	180	9.5
49	710,510	6.5	15,035	7.7	722	8.6	170	9.0
50	702,275	6.3	14,801	7.5	704	8.5	184	9.8
51	707,274	6.3	14,764	7.5	684	8.3	164	8.7
52	690,074	6.1	14,144	7.1	673	8.2	155	8.2
5カ年平均								
36~40	690,036.8	7.2	16,103.4	8.0	921.2	9.6	213.4	9.9
41~45	687,730.4	6.8	15,277.8	7.8	817.8	9.0	192.8	9.4
46~50	698,094.6	6.5	14,812.6	7.6	718.6	8.5	175.8	9.2

—三春町における医療・保健問題—

(資料) 第4表に同じ。

(注) ①「死亡率」は年央人口1,000人あたりの死亡数である。

②「5カ年平均」の場合の「死亡率」は平均年央人口1,000人あたりの平均死亡数である。

と跛行的低下については、①これらの地域が「過疎」化農村地域をなしており、医療・保健の面で大きく立ちおくれしていたこと、②丘陵性耕作地に多くを依存する葉たばこ、養蚕等々の複合経営が農繁期の連続化と人力依存、多忙、過労と健康無視を生んできたこと、③婦人労働への依存が妊産婦・乳幼児の事故を必然的に多発させてきたこと、④にもかかわらず近年の乳児死亡率の低下が急速かつ跛行的に進行していること、などがその原因であろう。

さらに、三春町における地区別の死亡数・死亡率は第7表および第4図のとおりである。一見して明らかのように、要田、中妻、中郷などの農業地域で死亡率が高く、三春、岩江などの市街地ないしは住宅地化地域で低いことがわかる。それは表注に示した数値からも明らかであり、そうしたことの一般的原因についてもすでに指摘したところである。

かくして、以上のことから、市街地・住宅地化地域における少産少死（低出生率・低死亡率）、および純農村部における多産多死（高出生率・高死亡率）という一般的傾向が一応確認できそうである。

そこでさらに、以上のような出生・死亡動向を総括するものとして、自然増加の動向をみよう。第8表および第5図は自然増加の全体比較をみたものであるが、出生率の序列と死亡率の序列がとりわけ四〇年代には逆になっていることなどから、全体としては国V県V郡・町という序列が現われている。また、地区別の自然増加をみると第9表および第6図のとおりである。ここでは、同じく市街地ないしは住宅地化地域として類別される三春と岩江が正反対の傾向（前者は上昇傾向、後者は低下傾向）を示していること、概して純農村部が低位停滞的であること、などがうかがえる。したがって、三春と岩江のちがいについても、直接には両者の出生・死亡動向の差異（前出第4図参照）によっており、つまりは、とりわけ岩江地区が純農村地区から住宅地区（共稼ぎ通勤者世帯の増加が進行している）への移行途上にあることが、この結果をもたらしている。

ところで、住民の健康問題と人口動態との関連では、さらに乳児死亡の動向をみなければならぬ。第10表および第7

第7表 地区別死亡数・死亡率

年次	三		春		沢		石		要		田		御		木		沢		中		郷		中		妻		岩		江		計		
	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率			
昭和36年	60	× 6.5	23	○ 9.9	14	○ 10.2	13	× 5.6	46	○ 13.9	25	○ 13.3	18	○ 11.3	199	9.8																	
37	66	× 7.3	18	× 7.7	24	○ 17.6	19	× 8.3	37	○ 11.4	24	○ 12.8	9	× 5.7	197	9.0																	
38	66	× 7.3	27	○ 12.2	15	○ 11.2	17	× 7.7	36	○ 11.4	18	○ 9.8	15	○ 9.7	194	9.1																	
39	64	× 7.1	20	○ 9.1	19	○ 11.3	13	× 5.9	31	○ 9.9	20	○ 11.8	12	× 7.9	179	8.3																	
40	82	× 9.1	17	× 7.9	26	○ 15.1	15	× 6.8	21	× 6.8	24	○ 13.8	11	× 7.4	196	9.2																	
41	66	× 7.4	15	× 6.9	22	○ 12.8	18	○ 8.3	27	○ 9.0	16	○ 9.5	7	× 4.7	171	8.1																	
42	50	× 5.7	16	× 7.5	14	○ 8.2	18	○ 8.5	29	○ 9.9	19	○ 11.6	14	○ 9.4	160	7.7																	
43	48	× 5.6	24	○ 11.4	29	○ 16.8	19	○ 9.2	20	× 6.8	15	○ 9.4	11	× 7.6	166	8.1																	
44	58	× 6.9	18	× 8.7	29	○ 17.0	25	○ 12.2	24	× 8.3	13	× 8.3	15	○ 10.5	182	9.1																	
45	55	× 6.6	13	× 6.7	20	○ 11.8	16	○ 7.9	24	○ 8.3	14	○ 8.9	11	○ 7.7	153	7.7																	
46	50	× 6.1	15	× 7.9	20	○ 12.0	17	× 8.1	30	○ 10.9	19	○ 12.7	7	× 4.8	158	8.1																	
47	51	× 6.4	18	○ 9.6	17	○ 10.3	11	× 5.3	34	○ 12.6	14	○ 9.6	10	× 6.9	155	8.1																	
48	53	× 6.8	21	○ 11.3	20	○ 12.5	21	○ 9.9	28	○ 10.6	13	○ 9.1	12	× 8.2	168	8.9																	
49	47	× 6.1	24	○ 15.2	23	○ 14.5	12	× 5.7	28	○ 10.5	11	× 7.7	12	× 8.1	157	8.3																	
50	61	× 7.9	21	○ 11.4	24	○ 15.5	14	× 6.8	30	○ 11.0	16	○ 11.3	12	× 7.7	178	9.5																	
51	46	× 6.1	21	○ 11.8	24	○ 15.1	12	× 5.7	25	○ 9.2	10	× 6.9	16	○ 9.4	154	8.2																	
52	51	× 6.9	15	○ 8.4	17	○ 10.7	13	× 6.2	14	× 5.2	15	○ 10.3	13	× 6.8	138	7.3																	

5カ年平均 36~40	67.6	×	7.5	×	21.0	○	9.4	○	19.6	○	13.1	×	15.4	×	6.9	×	34.2	○	10.7	○	22.2	○	12.2	○	13.0	×	8.4	×	193.0	8.9
41~45	55.4	×	6.5	×	17.2	○	8.2	○	22.8	○	13.3	×	19.2	×	9.2	×	24.8	○	8.5	○	15.4	○	9.6	○	11.6	×	8.0	×	166.4	8.1
46~50	52.4	×	6.7	×	19.8	○	10.6	○	20.8	○	12.9	×	15.0	×	7.1	×	30.0	○	11.1	○	14.6	○	10.1	○	10.6	×	7.2	×	163.2	8.6

(資料) 三春町民生報資料より作成。

(注) ①「死亡率」は各地区別年中央人口1,000人あたりの死亡数である。

②「5カ年平均」の場合の「死亡率」は地区別平均年中央人口1,000人あたりの平均死亡数である。

三春 沢石 栗田 御木沢 中郷 中妻 岩江

③死亡率の欄にある○印は町平均死亡率よりも1人以上高いことを示す。

○印は

1人未満だけ高いことを示す。

×印は

低いことを示す。

×印は

1人以上低いことを示す。

死亡率 (昭和36~52年) の単純平均8.5以上の年数は次のようである。

1 10 16 4 12 14 5

図は乳児死亡に関する全体比較であるが、阿武隈山地の丘陵性耕作地における婦人労働のあり方とかかわって重大であった非常に高い乳児死亡率が近年急速に低下してきたことがわかる。また、これを地区別にみたのが第11表である。これによると、地区別総死亡者中にしめる乳児死亡数の割合がとくに高いのは中妻と中郷であり、乳児死亡率で高いのはやはり中妻、中郷、要田、沢石などである。そして、三春が両指標とも平均以下で推移していることと考え合せれば、乳児死亡については、とりわけ純農村部において重大であったことがわかる。

さらに、新生児死亡についての第12表をみると、この間の新生児死亡率はおおむね町▽郡▽県▽国という序列のまま推移してきたことがわかる。なお、これに関する地区別の資料はえられなかった。

第8表 自然増加についての全体比較

年次	全 国		福 島 県		田 村 郡		三 春 町	
	数	率	数	率	数	率	数	率
昭和35年	899,442	9.6	22,195	10.8	1,623	14.0	235	10.4
36	893,728	9.5	20,365	9.9	1,057	10.8	199	9.1
37	908,351	9.5	18,826	9.3	980	10.1	176	8.1
38	988,751	10.3	18,591	9.2	1,162	12.0	190	8.9
39	1,043,694	10.7	17,520	8.8	944	9.9	162	7.5
40	1,123,259	11.4	16,698	8.4	880	9.3	131	6.2
41	690,632	7.0	9,591	4.9	537	5.8	97	4.6
42	1,260,641	12.7	17,652	9.0	838	9.1	134	6.5
43	1,185,284	11.8	15,016	7.7	607	6.7	125	6.1
44	1,196,028	11.9	14,721	7.7	658	7.4	79	3.9
45	1,221,277	11.9	14,280	7.3	559	6.3	116	5.8
46	1,316,452	12.6	16,053	8.3	542	6.2	93	4.8
47	1,354,931	12.8	16,917	8.8	561	6.5	129	6.7
48	1,382,567	12.8	17,369	9.0	508	6.0	109	5.8
49	1,319,165	12.1	17,849	9.2	520	6.2	134	7.2
50	1,199,165	10.8	16,486	8.4	478	5.7	104	5.5
51	1,129,343	10.0	16,817	8.5	511	6.1	108	5.7
52	1,065,026	9.4	17,082	8.6	552	6.6	137	7.2
5カ年平均								
36~40	991,556.6	10.3	18,400.0	9.2	1,004.6	10.4	171.6	8.0
41~45	1,110,772.4	11.0	14,252.0	7.3	639.8	7.1	110.2	5.4
46~50	1,314,456.0	12.2	16,934.0	8.7	521.8	6.1	113.8	6.0

— 三春町における医療・保健問題 —

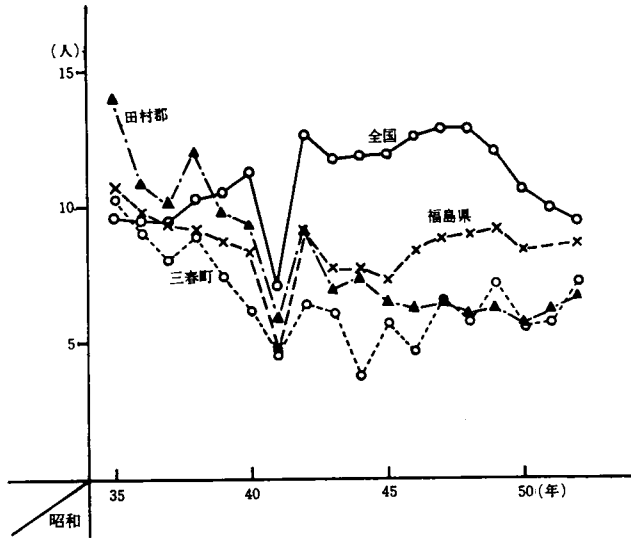
(資料) 第4表に同じ。

(注) ①「自然増加数」は出生数－死亡数である。

「自然増加率」は年央人口1,000人あたりの自然増加数である。

②「5カ年平均」の場合の「自然増加率」は平均年央人口1,000人あたりの平均自然増加数である。

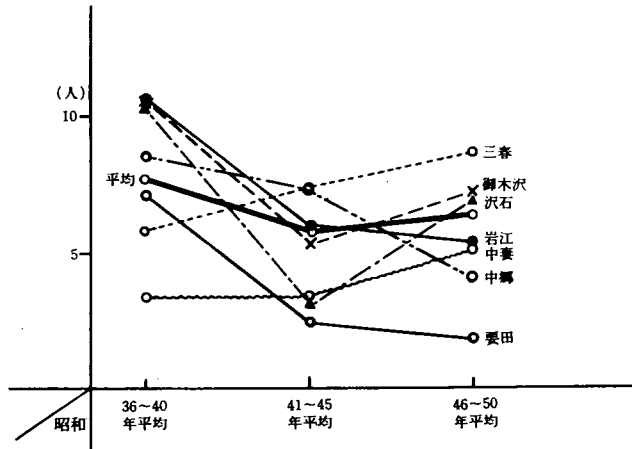
第5図 自然増加率の全体比較



(資料) 第8表より作成。

(注) 年央人口1,000人あたりの数値である。

第6図 地区別自然増加率



(資料) 第9表下段より作成。

(注) 5カ年平均年央人口1,000人あたりの平均数である。

必ずしも地域的特徴は明示されえない。

また、死産についての第13表および第14表を用意したが、死産には自然死産と人工死産がふくまれ、その合計数からはこのほか、類似の人口動態統計としては周産期死亡——すなわち後期死産（妊娠八カ月以降の死産）プラス早期新生児

死亡（生後一週未満の死亡）——や低体重児（未熟児）に関するものなどがあるが、いずれも長期にわたる資料を用意することができなかったのび、今回は割愛せざるを得なかった。

第9表 地区別自然増加数・自然増加率

年次	三		沢		石		栗		田		御		中		郷		中		妻		岩		江		計							
	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率						
昭和36年	58	6.3	32	13.7	26	19.0	34	14.8	16	4.8	10	5.3	17	10.7	193	8.8	67	7.4	15	6.4	9	6.6	23	10.0	36	11.1	6	3.2	17	10.8	173	7.9
37	67	7.4	15	6.4	9	6.6	27	12.1	15	4.7	15	8.1	18	11.6	154	7.2	49	5.4	14	6.3	16	12.4	19	8.6	27	8.6	8	4.5	11	7.2	153	7.1
38	49	5.4	14	6.3	16	12.4	27	12.1	15	4.7	15	8.1	18	11.6	154	7.2	39	5.6	32	14.6	19	8.6	16	7.3	25	8.6	6	3.8	0		116	5.8
39	56	6.2	32	14.6	0		19	8.6	27	8.6	8	4.5	11	7.2	153	7.1	40	3.3	22	10.3	2	1.2	16	7.3	41	13.3	△8	△4.6	19	12.7	125	5.8
40	33	3.7	22	10.3	2	1.2	16	7.3	41	13.3	△8	△4.6	19	12.7	125	5.8	41	4.4	6	2.8	2	1.2	11	5.1	25	8.3	10	5.9	11	7.4	109	5.2
41	44	5.0	6	2.8	2	1.2	11	5.1	25	8.3	10	5.9	11	7.4	109	5.2	42	7.1	9	4.3	2	1.2	9	4.3	19	6.5	2	1.2	13	8.8	140	6.7
42	71	8.1	14	6.6	12	7.0	9	4.3	19	6.5	2	1.2	9	4.3	19	6.5	43	7.4	0		7	4.1	7	3.4	26	8.9	2	1.3	14	9.7	130	6.4
43	74	8.6	0		7	4.1	7	3.4	26	8.9	2	1.3	14	9.7	130	6.4	44	6.8	8	3.9	△6	△3.5	15	7.3	25	8.6	6	3.8	0		116	5.8
44	68	8.1	8	3.9	△6	△3.5	15	7.3	25	8.6	6	3.8	0		116	5.8	45	6.0	4	2.0	6	3.5	13	6.5	12	4.2	7	4.5	6	4.2	108	5.4
45	60	7.2	4	2.0	6	3.5	13	6.5	12	4.2	7	4.5	6	4.2	108	5.4	46	6.5	9	4.7	△4	△2.4	12	5.7	17	6.2	△2	△1.3	7	4.8	104	5.3
46	65	8.0	9	4.7	△4	△2.4	12	5.7	17	6.2	△2	△1.3	7	4.8	104	5.3	47	8.4	14	7.5	10	6.1	13	6.2	0		10	6.9	9	6.2	140	7.3
47	84	10.6	14	7.5	10	6.1	13	6.2	0		10	6.9	9	6.2	140	7.3	48	68	13	7.0	4	2.5	13	6.1	7	2.7	11	7.7	2	1.4	118	6.2
48	68	8.7	13	7.0	4	2.5	13	6.1	7	2.7	11	7.7	2	1.4	118	6.2	49	75	14	7.6	6	3.8	17	8.0	16	6.0	12	8.4	8	5.4	148	7.9
49	75	9.8	14	7.6	6	3.8	17	8.0	16	6.0	12	8.4	8	5.4	148	7.9	50	34	14	7.6	△1	△0.6	21	10.2	15	5.5	5	3.5	13	8.4	101	5.4
50	34	4.4	14	7.6	△1	△0.6	21	10.2	15	5.5	5	3.5	13	8.4	101	5.4																

51	54	7.2	7	3.9	△1	△0.6	12	5.7	14	5.2	21	14.6	10	5.9	117	6.2
52	39	5.2	19	10.7	14	8.9	21	10.0	33	12.1	15	10.3	13	7.3	154	8.1
5カ年平均																
36~40	52.6	5.8	23.0	10.3	10.6	7.1	23.8	10.6	27.0	8.5	6.2	3.4	16.4	10.6	159.6	7.4
41~45	63.4	7.4	6.4	3.1	4.2	2.5	11.0	5.3	21.4	7.3	5.4	3.3	8.8	6.0	120.6	5.9
46~50	65.2	8.3	12.8	6.9	3.0	1.9	15.2	7.2	11.0	4.1	7.2	5.0	7.8	5.3	122.2	6.4

(資料) 三春町民生課資料より作成。

(注) ① 「自然増加数」は出生数－死亡数である。

「自然増加率」は年央人口1,000人あたりの自然増加数である。

② 「5カ年平均」の場合の「自然増加率」は平均年央人口1,000人あたりの平均自然増加数である。

第10表 乳児死亡についての全体比較

年次	全 国		福 島 県		田 村 郡		三 春 町	
	数	率	数	率	数	率	数	率
昭和35年	49,293	30.7	1,624	41.4	210	75.2	29	65.5
36	45,465	28.6	1,363	36.7	142	64.5	29	70.2
37	42,797	26.4	1,292	36.3	141	71.8	23	54.6
38	38,442	23.2	1,070	31.4	105	52.0	30	75.6
39	34,967	20.4	855	25.9	99	54.0	13	37.0
40	33,742	18.5	742	22.6	97	54.6	16	46.6
41	26,217	19.3	637	25.9	62	45.4	14	47.6
42	28,928	14.9	570	17.4	47	28.1	10	31.4
43	28,600	15.3	561	18.5	57	38.8	6	19.2
44	26,874	14.2	528	17.7	41	28.0	13	42.8
45	25,412	13.1	445	14.9	30	22.9	5	17.5
46	24,805	12.4	435	14.2	31	24.4	9	33.2
47	23,773	11.7	416	13.2	28	22.2	7	23.6
48	23,683	11.3	418	12.9	24	19.3	5	17.3
49	21,888	10.8	410	12.4	22	17.7	4	13.2
50	19,108	10.0	408	13.0	14	11.8	3	10.4
51	17,101	9.3	329	10.0	12	10.0	2	7.4
52	15,666	8.9	301	9.6	14	11.4	4	13.7
5カ年平均								
36~40	39,082.6	23.2	1,064.4	30.8	116.4	59.4	22.2	57.7
41~45	27,206.2	15.1	548.2	18.6	47.4	32.5	9.6	31.0
46~50	22,651.4	11.3	417.4	13.1	23.8	19.2	5.6	19.3

―三春町における医療・保健問題―

(資料) 第4表に同じ。

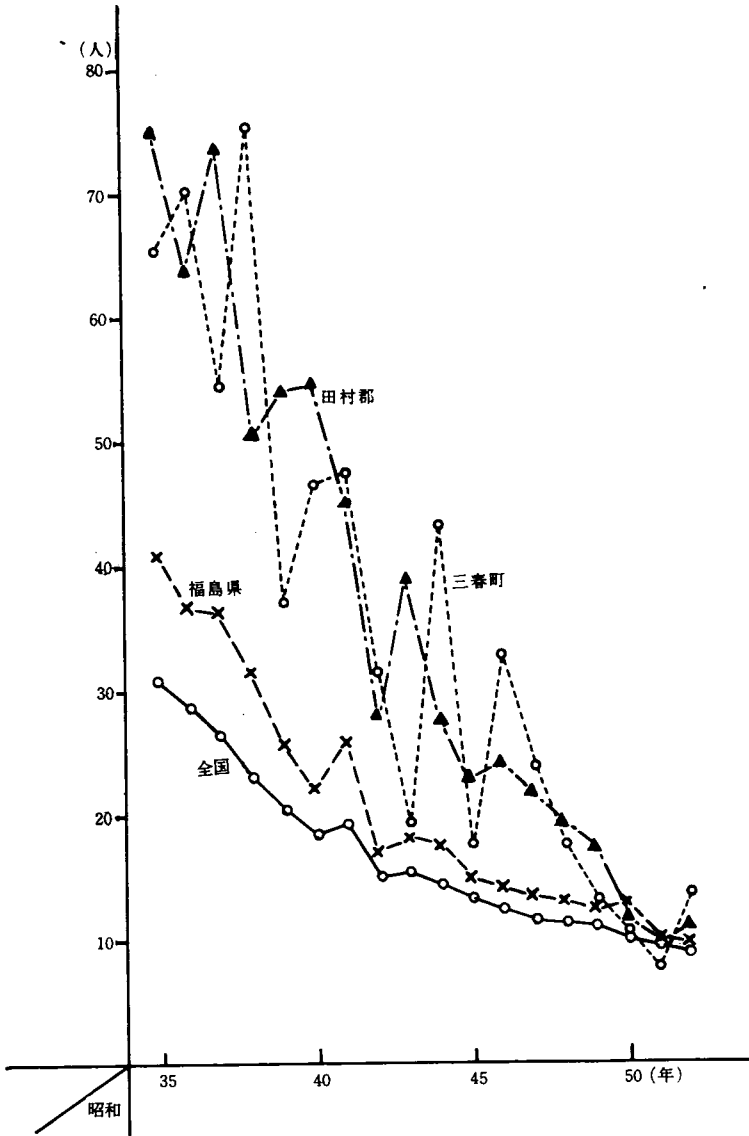
(注) ①「乳児死亡」とは生後1年未満の死亡をさす。

②「乳児死亡率」は出生数1,000人あたりの乳児死亡数である。

③「5カ年平均」の場合の「乳児死亡率」は5カ年の平均出生数(第4表下段を参照)1,000人あたりの平均乳児死亡数である。

第7図 乳児死亡率の全体比較

—三春町における医療・保健問題—



(資料) 第10表より作成。

(注) 出生数1,000人あたりの数値である。

中 郷			中 妻			岩 江			計			年次
数	構成比	率	数	構成比	率	数	構成比	率	数	構成比	率	
9	19.6	145.2	6	24.0	171.4	3	16.7	85.7	27	13.6	70.5	昭和36年
7	18.9	95.9	5	20.8	166.7	0			23	9.4	54.6	37
6	16.5	98.4	3	16.7	90.9	0			25	12.9	75.6	38
2	6.5	34.5	1	5.0	35.7	2	16.7	87.0	12	6.7	36.1	39
1	4.8	16.1	6	25.0	375.0	1	9.1	33.3	14	7.1	43.6	40
3	11.1	57.7	1	6.3	38.5	1	14.3	55.6	12	7.0	42.9	41
4	13.8	83.3	1	5.3	47.6	0			9	5.6	30.0	42
0			1	6.7	58.8	1	9.1	40.0	5	3.0	16.9	43
2	8.3	40.8	2	15.4	105.3	1	6.7	66.7	12	6.6	41.7	44
0			1	7.1	47.6	1	9.1	58.8	5	3.3	19.2	45
2	6.7	42.6	2	10.5	125.0	0			9	5.7	34.5	46
1	2.9	29.4	2	14.3	83.3	0			7	4.5	23.7	47
2	7.1	57.1	0		0	0			5	3.0	17.5	48
1	3.6	22.7	1	9.1	43.5	0			4	2.5	13.1	49
1	3.3	22.2	0			1	8.3	40.0	3	1.7	10.6	50
0			0			0			2	1.3	7.4	51
0			0			0			4	2.9	13.7	52
5.0	14.6	79.1	4.2	18.9	147.9	1.2	9.2	40.8	20.2	10.5	57.3	5 力年平均 36~40
1.8	7.3	68.7	1.2	7.8	57.7	0.8	6.9	39.7	8.6	5.2	32.5	41~45
1.4	4.7	34.1	1.0	6.8	44.2	0.2	1.9	10.9	5.6	3.4	18.3	46~50

— 三春町における医療・保健問題 —

第11表 地区別乳児死亡数・乳児死亡率

年次	三 春			沢 石			要 田			御 木 沢		
	数	構成比	率	数	構成比	率	数	構成比	率	数	構成比	率
昭和36年	4	6.7	33.9	3	13.0	65.2	2	14.3	50.0	0		
37	5	7.6	37.6	0			4	16.7	121.2	2	10.5	47.6
38	9	13.6	78.3	4	14.8	97.6	2	13.3	64.5	1	5.9	22.7
39	2	3.1	16.7	1	5.0	19.2	1	5.3	52.6	3	23.1	93.8
40	5	6.1	43.5	0			1	3.8	35.7	0		
41	3	4.5	27.3	1	6.7	47.6	2	9.1	83.3	1	5.6	34.5
42	1	2.0	8.3	0			1	7.1	38.5	2	11.1	74.1
43	1	2.1	8.2	0			2	6.9	55.5	0		
44	0			3	16.7	115.4	1	3.4	43.5	3	12.0	75.0
45	2	3.6	17.4	0			0			1	6.3	34.5
46	2	4.0	17.4	1	6.7	41.7	2	10.0	125.0	0		
47	2	3.9	14.8	2	11.1	62.5	0			0		
48	0			2	9.5	58.8	0			1	4.8	29.4
49	0			1	4.2	26.3	1	4.3	34.5	0		
50	0			0			1	4.2	43.5	0		
51	1	2.2	10.0	1	4.8	35.7	0			0		
52	2	3.9	22.2	1	6.7	29.4	1	5.9	32.3	0		
5カ年平均												
36~40	5.0	7.4	41.6	1.6	7.6	37.9	2.0	10.2	66.2	1.2	7.8	30.6
41~45	1.4	2.5	12.0	0.8	4.7	33.9	1.2	5.3	44.4	1.4	7.3	46.4
46~50	0.8	1.5	6.8	1.2	6.1	36.8	0.8	3.8	33.6	0.2	1.3	6.6

(資料) 三春町民生課資料より作成。

(注) ①「構成比」は地区別総死亡数にたいする構成比(%)である。

「乳児死亡率」は出生数1,000人あたりの乳児死亡数である。

②「5カ年平均」の場合の「構成比」は地区別の平均総死亡数にたいする構成比(%)である。

③「5カ年平均」の場合の「乳児死亡率」は地区別の平均出生数1,000人あたりの平均乳児死亡数である。

第12表 新生児死亡についての全体比較

年次	全 国		福 島 県		田 村 郡		三 春 町	
	数	率	数	率	数	率	数	率
昭和36年	26,255	16.5	724	19.5	64	29.1	15	36.3
37	24,777	15.3	653	18.4	58	29.5	12	28.5
38	22,965	13.8	586	17.2	54	26.7	19	47.9
39	21,344	12.4	481	14.6	47	25.6	6	17.1
40	21,260	11.7	423	12.9	49	27.6	12	35.0
41	16,296	12.0	367	14.9	30	22.0	7	23.8
42	19,248	9.9	343	10.5	23	13.7	4	12.6
43	18,326	9.8	346	11.4	27	18.4	4	12.8
44	17,116	9.1	312	17.6	17	11.6	4	13.5
45	16,742	8.7	281	9.4	14	10.7	4	14.0
46	16,450	8.2	275	9.0	15	11.8	6	22.1
47	15,817	7.8	248	7.9	14	11.1	2	6.8
48	15,473	7.4	278	8.6	11	8.8	2	6.9
49	14,472	7.1	258	7.8	12	9.7	2	6.6
50	12,912	6.8	286	9.1	11	9.3	1	3.5
51	11,638	6.4	223	7.1	9	7.5	1	3.7
52	10,773	6.1	219	7.0	10	8.2	3	10.3
5カ年平均								
36~40	23,320.2	13.9	573.4	16.6	54.4	27.8	12.8	33.2
41~45	17,545.6	9.8	329.8	11.2	22.2	15.2	4.6	15.2
46~50	15,024.8	7.5	269.0	8.5	12.6	10.2	2.6	9.0

— 三春町における医療・保健問題 —

(資料) 第4表に同じ。

(注) ①「新生児死亡」とは生後28日未満の死亡をいう。

「新生児死亡率」は出生数1,000人あたりの新生児死亡数である。

②「5カ年平均」の場合の「新生児死亡率」は、平均出生数1,000人あたりの平均新生児死亡数である。

第13表 死産についての全体比較

年次	全 国		福 島 県		田 村 郡		三 春 町	
	数	率	数	率	数	率	数	率
昭和36年	179,895	101.7	4,056	98.6	194	80.9	50	108.0
37	177,363	98.8	3,797	96.5	188	87.3	43	92.7
38	175,424	95.6	3,603	95.6	155	71.2	35	81.0
39	168,046	89.2	3,443	94.5	180	89.3	33	85.9
40	161,617	81.4	3,154	86.0	171	87.9	46	118.3
41	148,248	98.2	2,846	103.6	136	90.5	37	111.8
42	149,389	71.6	2,664	75.2	133	73.6	39	109.2
43	143,259	71.1	2,413	73.6	105	66.7	30	87.5
44	139,211	68.6	2,284	70.6	95	60.9	20	61.7
45	135,095	65.3	2,348	72.7	122	85.1	31	97.8
46	130,920	61.4	2,275	69.0	111	80.3	23	78.2
47	125,154	57.8	2,241	66.6	84	62.4	12	39.0
48	116,173	52.6	2,005	60.9	71	54.0	15	49.3
49	109,738	51.3	1,887	54.3	69	52.6	19	58.8
50	101,862	50.8	1,778	53.8	73	58.2	17	59.0
51	101,930	52.7	1,757	52.7	73	57.6	18	62.1
52	95,247	51.5	1,772	53.7	60	46.9	12	39.6
5カ年平均 36~40	172,469.0	93.0	3,610.6	94.7	177.6	83.1	41.4	97.1
41~45	143,040.4	73.7	2,511.0	78.5	118.2	75.0	31.4	93.9
46~50	116,769.4	54.3	2,037.2	60.3	81.6	61.7	17.2	56.1

(資料) 第4表に同じ。

(注) ①「死産率」は出産数(出生数+死産数)1,000件あたりの死産数である。

②「5カ年平均」の場合の「死産率」は平均出産数1,000件あたりの平均死産数である。

第14表 地区別死産数・死産率

年次	三		沢		石		栗		田		御		木		沢		中		郷		中		妻		岩		江		計		
	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率	数	死産率			
昭和36年	4	32.8	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	2	31.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	17.9
37	5	36.2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	2	26.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	18.6	
38	3	25.4	1	1	23.8	0	0	0	0	0	0	1	1	16.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	16.5		
39	5	40.0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	4	4	64.5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	17	48.7		
40	13	101.6	4	4	93.0	2	2	66.6	2	2	2	2	7	7	101.4	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	31	88.1		
41	7	59.8	5	5	92.3	5	5	172.4	3	3	3	4	4	71.4	4	4	1	1	40.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	26	85.0	
42	9	75.0	4	4	117.6	3	3	103.4	4	4	0	0	3	5	40.0	5	5	2	2	98.0	2	2	2	2	2	2	2	25	76.9		
43	7	54.3	1	1	40.0	0	0	115.4	0	0	2	2	0	1	20.0	1	1	0	0	20.0	0	0	0	0	0	0	0	9	48.2		
44	2	16.9	0	0	55.5	2	2	71.4	0	0	0	0	47.6	3	76.9	3	3	0	0	76.9	0	0	0	0	0	0	0	10	30.3		
45	3	25.4	1	1	40.0	3	3	157.9	2	2	2	2	64.5	0	28.8	0	0	2	2	28.8	2	2	2	2	2	2	2	2	10	36.9	
46	4	33.6	1	1	40.0	3	3	35.7	2	2	0	0	111.1	0	50.0	0	0	0	0	50.0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	47.4	
47	1	7.4	1	1	30.3	1	1	40.0	3	3	1	1	111.1	1	28.8	1	1	1	1	40.0	1	1	1	1	1	1	1	1	8	26.4	
48	4	32.0	1	1	28.6	1	1	40.0	2	2	0	0	55.6	0	47.6	0	0	0	0	76.9	0	0	0	0	0	0	0	0	10	33.8	
49	3	24.0	1	1	34.5	0	0	80.0	0	0	0	0	0	0	21.7	0	0	1	1	37.0	1	1	1	1	1	1	1	5	16.2		
50	5	50.0	1	1	34.5	2	2	80.0	0	0	0	0	0	1	21.7	1	1	1	1	37.0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	34.0	
51	1	9.9	1	1	34.5	2	2	80.0	0	0	1	1	28.6	2	48.8	2	2	0	0	96.2	0	0	0	0	0	0	0	0	6	21.7	
52	3	32.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	96.2	0	0	0	0	37.0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	33.1	
5カ年平均	6.0	47.5	1.0	1.0	23.1	1.2	1.2	38.2	0.8	0.8	20.0	3.2	48.2	1.2	40.5	0.2	0.2	6.8	13.6	37.1	0.2	0.2	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	13.6	37.1	
36~40	5.6	46.5	2.2	2.2	85.3	2.6	2.6	87.8	1.8	1.8	56.3	3.0	61.0	1.4	63.1	0.4	0.4	19.2	17.0	56.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	17.0	56.3	
41~45	3.4	28.1	1.0	1.0	29.8	1.4	1.4	55.6	1.4	1.4	44.3	0.4	9.2	1.2	50.4	0.4	0.4	21.3	9.2	31.1	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	9.2	31.1	

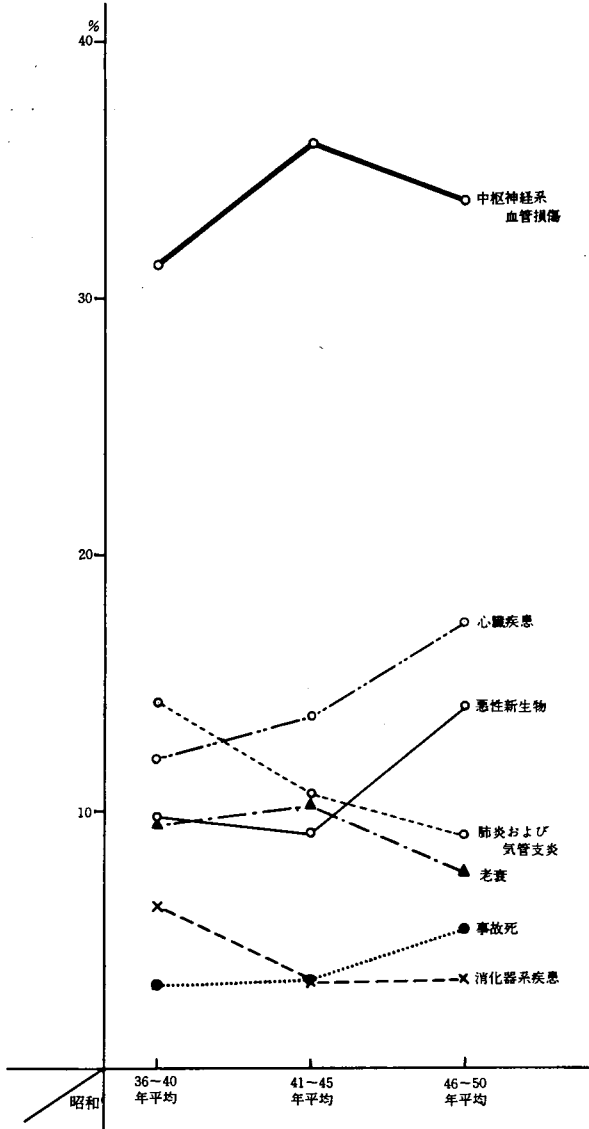
(資料) 三春町民生課資料より作成。

(注) ①ここでの死産数は「三春町内で発生し、かつ届出のあったもの」である。

②「死産率」は出産数(出生数+死産数)1,000件あたりの死産数である。

③「5カ年平均」の場合の「死産率」は平均出産数1,000件あたりの平均死産数である。

第8図 死亡原因の割合（三春町）



（資料）第15表より作成。

二 死亡原因にみる地域的特徴

そこで次に、死亡原因と地区の性格との関連について検討してみよう。

第8図および第15表は三春町における昭和三六年以来の病類別死亡原因とその構成比である。これを五年ごとの三期に

老 衰		事 故 死		新 生 児 固 有 疾 患		そ の 他		左 記 分 類 外	計	
数	(%)	数	(%)	数	(%)	数	(%)		数	(%)
16	8.0	4	2.0	32 (16.1%)					199	100.0
21	10.7	7	3.5	7	3.5	20	10.2		197	100.0
20	10.3	11	5.7	10	5.2	6	3.1		194	100.0
15	8.4	5	2.8	4	2.2	6	3.4		179	100.0
21	10.7	5	2.5	未熟児 3	1.5	10	5.1	糖尿病2,腎炎2,黄疸1,喘息5	196	100.0
19	11.1	6	3.5			20	11.7	糖尿病1,自殺6	171	100.0
19	11.9	3	1.9	虚弱 3	1.9	9	5.6		160	100.0
21	12.7	10	6.0	未熟児 2	1.2	5	3.0		166	100.0
12	6.6	4	2.2	2	1.1	15	8.3		182	100.0
14	9.2	7	4.6	2	1.3	10	6.5		153	100.0
12	7.6	9	5.7	5	3.2			腎臓疾患 5	158	100.0
10	6.5	11	7.1	2	1.3	4	2.6	糖尿病 3	155	100.0
13	7.7	12	7.1			10	6.0	尿毒症 4	168	100.0
11	7.0	6	3.8			9	5.7	自殺 4	157	100.0
17	9.6	7	3.9	1	0.6	10	5.6	自殺 3	178	100.0
21	13.6	3	1.9			10	6.5	自殺 4	154	100.0
15	10.9	5	3.6			5	3.6	自殺 4	138	100.0
18.6	9.6	6.4	3.3						193.0	100.0
17.0	10.2	6.0	3.6	1.8			11.8		166.4	100.0
12.6	7.7	9.0	5.5	1.6			6.6		163.2	100.0

の他」の中にふくまれているかもしれない。

ス, キンメルウェルソン症候群, 白血病, 糖尿病性昏腫, 急性腹膜炎, 急性肝炎
急性肝炎, 胆嚢炎, 肝性昏腫, 脳腫瘍

ヒ, 老人性精神病, 不可逆性ショック, 呼吸不全, 脳蓋内出血, 再生不良性貧血

(2), 未熟児

第15表 病類別死亡原因（三春町）

年次	中枢神経系 血管損傷		肺炎および 気管支炎		全結核		悪新 生物		心臓疾患		消化器系 疾患		肝臓疾患	
	数	(%)	数	(%)	数	(%)	数	(%)	数	(%)	数	(%)	数	(%)
昭和36	56	28.6	32	16.1	0		31	15.6	15	7.5	13	6.5		
37	56	28.4	35	17.8	1	0.5	9	4.6	34	17.3	7	3.5		
38	59	30.4	28	14.4	4	2.1	23	11.8	20	10.3	13	6.7		
39	60	33.5	24	13.4	肺 ₂	1.1	18	10.1	28	15.6	13	7.3	4	2.2
40	72	36.7	19	9.7			15	7.7	20	10.2	16	8.2	5	2.5
41	60	35.1	20	11.7			13	7.6	17	9.9	2	1.2	4	2.3
42	57	25.6	17	10.6	肺 ₄	2.5	18	11.2	26	16.3	2	1.2	2	1.2
43	56	33.7	20	12.0	4	2.4	13	7.8	25	15.1	8	4.8	2	1.2
44	77	42.3	18	9.9	肺 ₁	0.5	19	10.4	22	12.1	9	4.9	3	1.7
45	50	32.7	14	9.2	肺 ₁	0.6	14	9.2	25	16.3	8	5.2	8	5.2
46	64	40.5	13	8.2	腎 ₁	0.6	23	14.5	20	12.7	6	3.8		
47	48	31.0	14	9.0			24	15.5	29	18.7	5	3.2	5	3.2
48	61	36.3	9	5.4			22	13.1	30	17.9	3	1.8	4	2.4
49	45	28.7	19	12.1			23	14.6	29	18.5	11	7.0		
50	59	33.1	19	10.7			24	13.5	34	19.1	4	2.2		
51	52	33.8	9	5.8			29	18.8	23	14.9	3	1.9		
52	40	29.0	17	12.3			24	17.4	24	17.4	4	2.9		
5カ年平均 36~40	60.6	31.4	27.6	14.3	1.4		19.2	9.9	23.4	12.1	12.4	6.4	1.8	0.9
41~45	60.0	36.1	17.8	10.7	2.0		15.4	9.3	23.0	13.8	5.8	3.5	3.8	2.3
46~50	55.4	33.9	14.8	9.1	0.2		23.2	14.2	28.4	17.4	5.8	3.6	1.8	1.1

（資料）三春町民生課資料より作成。

（注）①表中の空欄はその年に関して分類項目がないことを示す。したがって「そ

②昭和49年「その他」内訳——肺結核，小児マヒ，尿毒症，関節ロイマチ

50年 // ——外傷性老人性衰弱，尿毒症(2)，出血多量(2)，

51年 // ——糖尿病性昏腫(2)，膀胱壊死，肝硬変，脳性マ

52年 // ——湿性肋膜炎，肺水腫による循環不全，肝硬変

分けてみると、いくつかの点が指摘できる。第一に、中枢神経系血管損傷死はその絶対数を減らしながらも（三六〇四〇年平均にたいして四六〇五〇年平均で八・五八%減、ちなみに全死者数では同じく一五・四四%減）、全死者の三分の一をしめており、つねに第一位の死亡原因となっている。第二に、肺炎および気管支炎による死亡はこの一五年間におよそ半減し、そのため三〇年代後半の二位から四〇年代前半の三位へ、さらに四〇年代後半の四位へと、逐次その地位を下げている。これは主として老人および乳幼児にかたよった死亡原因であり、生活改善指導と乳児死亡の減少とがこの結果をもたらしている。第三に、心臓疾患死は四〇年代前半に絶対数で微減したとはいえ、四〇年代後半には大幅に増加し、このため死亡順位においても、三〇年代後半の三位から、四〇年代前半には二位にあがり、四〇年代後半にはさらにその比重を高めている。第四に、悪性新生物（癌）死は、三〇年代後半の四位から、四〇年代前半には絶対数が減って五位となったが、四〇年代後半には再び増加して三位となっている。第五に、老衰死が減少傾向にある一方で、自動車や動力式農機具の普及の結果と思われる事故死の増加傾向がうかがえる。

いずれにしても、一位中枢神経系血管損傷、二位心臓疾患、三位悪性新生物という最近の主要三大死亡原因だけで、四〇年代後半の全死者数の三分の二近くをしめている。そこで今度は、これらの三大死亡原因の各々について、より具体的に検討してみよう。

まず、中枢神経系血管損傷死であるが、第16表によってこれを全体的に比較してみると、死亡者中の構成比においても死亡率においても、町V郡V県V国という序列にあることがわかる。さらに、第17表によってこれを地区別に比較すると、表注にも集計されているように、両指標とも要田、中郷、沢石において高く、三春、岩江において低くなっている。かくして、この死亡原因については、とりわけ農村部において高い比重をしめていることが、全体比較からも町内地区別比較からも明らかであろう。これについては、農業地域における極長労働時間と過労、睡眠不足、多忙にまぎれた貧しい

第16表 中枢神経系血管損傷死についての全体比較

年次	全		国		福		高		県		田		村		郡		三		春		町
	死亡数	構成比	死亡率	死亡数	構成比	死亡率	死亡数	構成比	死亡率	死亡数	構成比	死亡率	死亡数	構成比	死亡率	死亡数	構成比	死亡率	死亡数	構成比	死亡率
昭和36年	155,966	22.4	165.4	4,770	28.5	234.3	278	29.3	283.5	61	28.5	278.0	65	33.0	298.8	72	40.4	368.2	61	28.5	278.0
37	161,228	22.7	169.4	4,581	26.0	227.0	264	26.0	272.0	67	27.3	310.0	63	34.2	319.9	53	31.3	276.6	67	27.3	310.0
38	164,818	24.6	171.4	4,732	32.2	235.4	277	32.2	287.2	56	27.1	262.1	64	34.0	331.9	67	37.2	354.1	56	27.1	262.1
39	166,901	24.8	171.7	4,892	32.1	244.3	286	32.1	299.4	52	27.5	242.1	87	38.7	337.4	51	30.0	271.2	52	27.5	242.1
40	172,773	24.7	175.8	5,054	33.2	254.3	297	33.2	314.4	79	37.3	272.4	60	35.3	297.8	66	35.9	349.9	79	37.3	272.4
41	172,186	25.7	173.8	4,816	33.5	244.3	278	33.5	298.8	65	33.0	307.0	63	34.2	319.9	72	40.4	368.2	65	33.0	307.0
42	172,464	25.5	173.1	5,003	35.1	254.3	294	35.1	319.9	63	34.2	303.5	64	34.0	331.9	53	31.3	276.6	63	34.2	303.5
43	174,905	25.5	173.5	5,041	34.9	257.3	302	34.9	299.4	64	34.0	313.0	64	34.0	331.9	67	37.2	354.1	64	34.0	313.0
44	177,894	25.6	174.4	5,045	37.4	258.1	302	37.4	337.4	87	38.7	432.0	87	38.7	337.4	51	30.0	271.2	87	38.7	432.0
45	181,315	25.4	176.8	5,049	27.6	259.5	263	27.6	297.8	60	35.3	301.5	60	35.3	297.8	66	35.9	349.9	60	35.3	301.5
46	176,952	25.9	169.6	4,885	35.6	251.8	260	35.6	298.4	72	40.4	368.2	72	40.4	298.4	72	40.4	368.2	72	40.4	298.4
47	176,228	25.8	166.7	4,771	35.9	243.7	252	35.9	293.7	53	31.3	276.6	53	31.3	293.7	53	31.3	276.6	53	31.3	276.6
48	180,332	25.4	166.9	4,798	35.9	247.7	264	35.9	312.1	67	37.2	354.1	67	37.2	312.1	67	37.2	354.1	67	37.2	354.1
49	180,365	25.4	163.0	4,787	32.3	246.0	233	32.3	277.7	51	30.0	271.2	51	30.0	246.0	51	30.0	271.2	51	30.0	271.2
50	174,367	24.8	156.7	4,540	34.1	230.4	240	34.1	288.1	66	35.9	349.9	66	35.9	230.4	66	35.9	349.9	66	35.9	349.9
51	173,719	24.7	154.5	4,522	32.7	228.9	224	32.7	270.2	54	32.9	286.5	54	32.9	228.9	54	32.9	286.5	54	32.9	286.5
52	170,029	24.6	149.8	4,324	30.6	217.3	214	31.8	258.0	52	33.5	275.0	52	33.5	217.3	52	33.5	275.0	52	33.5	275.0
5カ年平均	164,337.2	23.8	170.8	4,805.8	29.8	239.1	280.4	30.4	291.2	63.0	29.5	292.5	63.0	29.5	239.1	63.0	29.5	292.5	63.0	29.5	292.5
36~40	175,752.8	25.6	174.1	4,990.8	32.7	254.7	287.6	33.5	317.1	67.2	34.9	328.4	67.2	34.9	254.7	67.2	34.9	328.4	67.2	34.9	328.4
41~45	175,848.8	25.2	163.0	4,756.2	32.1	244.5	249.8	34.8	294.1	61.8	35.3	324.2	61.8	35.3	244.5	61.8	35.3	324.2	61.8	35.3	324.2

(資料) 昭和51年までは福島県厚生部『厚生行政の概況(衛生編)』(各年版)、昭和52年は厚生省大臣官房統計情報部『昭和52年人口動態統計(年報)概況』(昭和53年9月)、および福島県保健課境部『昭和52年死因統計年報概況』(昭和53年6月)より作成。

(注) ① 「構成比」は総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡率」は年央人口10万人あたりの死亡者数、つまり中枢神経系血管損傷死亡率である。

② 「5カ年平均」の場合の「構成比」は平均総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡率」は平均年央人口10万人あたりの平均死亡者数である。

第17表 地区別中枢神経系血管損傷死亡者数

年次	三		春		沢		石		要		田		御		木		沢	
	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率			
昭和36年	18	○30.0	196.0	6	26.1	○257.3	7	○50.0	○511.7	4	○30.8	173.5	4	○30.8	173.5			
37	16	24.2	175.9	8	○44.4	○347.6	5	20.8	○366.0	1	4.2	43.4	1	4.2	43.4			
38	20	30.3	221.3	8	29.6	○360.7	6	○40.0	○451.8	2	11.8	89.7	2	11.8	89.7			
39	29	○45.3	○323.6	7	○35.0	○181.5	7	○36.8	○414.7	2	15.4	91.0	2	15.4	91.0			
40	30	36.6	335.6	9	○52.9	○421.0	15	○57.7	○874.1	5	33.3	229.5	5	33.3	229.5			
41	15	22.7	170.0	6	○40.0	276.2	10	○45.2	○580.7	10	○55.6	○463.4	10	○55.6	○463.4			
42	18	○36.0	206.1	5	31.3	232.6	5	○35.7	○291.5	5	27.8	236.4	5	27.8	236.4			
43	17	○35.4	198.3	13	○54.2	○617.0	6	20.7	○347.6	6	31.6	○290.6	6	31.6	○290.6			
44	27	○46.6	320.9	3	16.7	145.4	10	34.5	○589.3	14	○56.6	○685.3	14	○56.6	○685.3			
45	16	29.1	191.9	5	○38.5	249.1	6	30.0	○353.6	8	○50.0	○399.2	8	○50.0	○399.2			
46	16	32.0	196.2	6	40.0	○316.5	9	○45.0	○538.9	8	○47.1	○379.0	8	○47.1	○379.0			
47	9	17.6	113.3	6	○33.3	○321.0	7	○41.2	○425.5	3	27.3	143.8	3	27.3	143.8			
48	16	30.2	205.0	4	19.0	215.7	11	○55.0	○687.9	11	○40.7	○517.6	11	○40.7	○517.6			
49	8	17.0	104.2	10	○41.7	○542.9	13	○56.5	○819.2	4	○33.3	○189.4	4	○33.3	○189.4			
50	12	19.7	156.3	9	○42.9	○488.3	10	○41.7	○645.2	7	○50.0	○339.8	7	○50.0	○339.8			
51	10	21.7	132.6	10	○47.6	○562.4	7	29.2	○441.1	5	○41.7	○239.3	5	○41.7	○239.3			
52	8	15.7	106.4	3	20.0	168.9	9	○52.9	○571.4	5	○38.5	○239.2	5	○38.5	○239.2			
5年内平均	22.6	○33.4	249.9	7.6	○37.6	○338.9	8.0	○40.8	○535.8	2.8	18.2	124.9	2.8	18.2	124.9			
36~40	18.6	33.6	216.9	6.4	○37.2	○305.3	7.4	32.5	○432.4	8.6	○44.8	○414.1	8.6	○44.8	○414.1			
41~45	12.2	23.3	155.4	7.0	○35.4	○376.2	10.0	○48.1	○621.0	6.6	○44.0	○314.5	6.6	○44.0	○314.5			
中	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率
昭和36年	8	17.4	241.7	8	○32.0	○424.4	5	27.8	○314.7	56	28.1	254.9	56	28.1	254.9			
37	14	○37.8	○431.2	8	○21.6	○427.4	4	○44.4	○254.9	56	28.4	257.1	56	28.4	257.1			

38	12	○33.3	○379.4	5	27.8	○271.4	6	○40.0	○386.6	59	30.4	276.2
39	9	29.0	○287.6	2	10.0	111.8	4	33.3	263.3	60	33.5	279.3
40	5	28.8	162.3	7	29.2	○403.5	1	9.1	66.9	72	36.7	338.3
41	9	33.3	○300.4	8	○50.0	○475.6	2	28.6	134.8	60	35.1	285.2
42	12	○41.4	○408.2	4	21.1	243.3	8	○57.1	○539.4	57	33.6	274.6
43	5	25.0	170.7	4	26.7	250.5	5	○45.5	○344.8	56	33.7	273.9
44	11	○45.8	380.2	4	○46.2	381.9	6	40.0	○419.6	77	42.3	382.9
45	9	○37.5	○312.0	4	28.6	○255.4	2	18.2	139.9	50	32.7	250.9
46	15	○50.0	○543.7	6	31.6	○400.0	4	○57.1	276.3	64	40.5	327.6
47	15	○44.1	○554.7	5	○35.7	○342.7	3	30.0	206.5	48	31.0	250.5
48	12	○42.9	○454.9	5	○38.5	○348.9	2	16.7	136.4	61	36.3	322.4
49	4	14.3	○149.8	3	27.3	210.1	3	25.0	201.7	45	29.4	239.3
50	10	○33.3	366.4	8	○50.0	○563.4	3	25.0	193.2	59	33.1	313.3
51	12	○48.0	○442.8	4	○40.0	○274.9	4	25.0	235.4	52	33.8	275.9
52	5	○35.7	183.4	6	○40.0	○412.4	4	○30.8	224.7	40	29.0	211.5
5カ年平均												
36~40	9.6	28.1	○301.4	6.0	27.0	○328.8	4.0	30.8	258.9	60.6	31.4	280.9
41~45	9.2	○37.1	○314.1	5.2	33.8	○322.6	4.6	○39.7	○316.1	60.0	36.1	293.3
46~50	11.2	○37.3	○414.8	5.4	○37.0	○372.9	3.0	28.3	202.5	55.4	33.9	290.8

(資料) 三春町民生課資料より作成。

(注) ① 「構成比」は地区別の総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡率」は地区別の各年中央人口10万人あたりの死亡者数、つまり中枢神経系血管損傷死亡率である。

② 「5カ年平均」の場合の「構成比」は平均総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡率」は平均中央人口10万人あたりの平均死亡者数である。

③ ○印は全町平均よりも高いことを示す。

	三春	沢石	栗田	御木沢	中郷	中妻	岩江
「構成比」が全町平均をこえる年数	5	10	12	10	11	8	6
「死亡率」	1	11	17	8	12	11	6

食生活、とりわけ塩分の多い簡便食に主要な原因があると思われる。(注)

(注) 農家の生活実態調査については、三春農協婦人部「農村健康調査結果報告書——まちがた 狐田・よまろし 過足地区——(昭和四七年度、四八年度)」がある。また、栄養調査については、三春保健所栄養士鈴木雅子氏による「御木沢地区栄養調査」、「児童の栄養状態に関する研究」(昭和五〇年)などが本格的・専門的な検討を行なっている。さらに、福島県農政部農業改良課「福島県農山漁村の生活」(昭和五〇年)や三春保健所「田村地方の栄養・活動・休養の現況」(昭和五〇年)などもあり、研究成果の有効な活用が望まれる。

次に、心臓疾患死であるが、福島県厚生部の資料では三春町に關しても悪性新生物死よりも明らかに低い数値になっており、この点では三春町民生課資料ととりわけ大きな相違をみせている。そのうえで、第18表によつて全体比較をみると、死亡者中の構成比や死亡率が全体的に上昇しつゝあること、三春町は構成比では低いが死亡率では高いことなどがうかがえる。また、第19表によつて地区別心臓疾患死亡の動向をみると、三春や岩江が総死亡者中の構成比においてもっとも高いだけでなく、対人口比つまり地区別心臓疾患死亡率においても近年急速に上昇していることがわかる。これにたいして、要田や沢石も全般的に高率を示しているとはいへ、近年その比率を低下させつつある点で前者とは対照的である。同時に、この死亡原因では、全体として御木沢の低さも目立っている。したがつて、心臓疾患死に關しては、むしろ都市型の死亡原因になりつつあるといえるかもしれない。

さらに、悪性新生物(癌)による死亡であるが、第20表にみるように、これまた全般的に著実な増加傾向を示している。ここでも三春町は総死亡者中の構成比以上に死亡率での高比率が示されている。つまり、三春町は中枢神経系血管損傷死が高率をしめるために、心臓疾患死や悪性新生物死の構成比は相対的に小さくなるが、死亡率一般が高いために後二者についても高い死亡率を示すことになっている。そこでさらに、地区別の悪性新生物死亡の動向をみたのが第21表である。ここでは、とりわけ死亡率一般で両極端を代表する三春(低)と要田(高)が互いに逆の傾向を示していることが目

第18表 心臓疾患死についての全体比較

年次	全		国	福 島 県		田 村	郡	三 春		町	
	死亡数	構成比		死亡数	構成比			死亡数	構成比		死亡数
昭和36年	68,017	9.8	72.1	8.9	73.5	65	6.9	66.3	4	1.9	18.2
37	72,493	10.2	76.2	9.6	79.7	61	6.0	62.8	26	10.6	120.3
38	67,672	10.1	70.4	9.4	72.3	57	6.6	59.1	13	6.3	60.8
39	68,328	10.2	70.3	10.1	78.2	67	7.5	70.1	22	11.6	102.4
40	75,672	10.8	77.0	10.4	84.4	65	7.3	68.8	15	7.1	70.4
41	71,188	10.6	71.9	10.8	82.4	59	7.1	63.4	14	7.1	66.5
42	75,424	11.2	75.7	10.6	81.3	56	6.7	60.9	14	7.6	67.4
43	80,866	11.8	80.2	11.6	91.0	82	9.5	90.4	20	10.6	97.8
44	83,357	12.0	81.7	11.7	91.0	70	8.7	78.2	16	7.1	79.4
45	89,411	13.1	86.7	12.2	98.4	72	7.6	81.6	14	8.2	70.4
46	85,529	12.5	82.0	12.3	92.6	82	11.2	94.1	13	7.3	66.5
47	85,885	12.1	81.2	12.3	92.2	81	11.5	94.4	22	13.2	114.8
48	94,324	13.3	87.3	11.8	91.7	67	9.1	79.2	14	7.8	73.9
49	98,251	13.8	89.8	12.9	99.7	82	11.4	97.7	22	12.9	117.0
50	99,226	14.1	89.2	13.0	97.9	86	11.9	103.2	25	13.6	132.6
51	103,598	14.6	92.2	13.0	97.4	70	10.2	84.4	17	10.4	90.2
52	103,564	15.0	91.2	13.8	97.6	94	14.0	113.6	17	11.0	89.9
5カ年平均	70,436.4	10.2	73.2	9.7	77.6	63.0	6.8	65.4	16.0	7.5	74.3
36~40	80,049.2	11.6	79.2	11.4	88.7	67.8	7.9	74.8	15.6	8.1	76.3
41~45	92,643.0	13.3	85.9	12.5	94.9	79.6	11.1	93.7	19.2	10.9	100.7

(資料) 第16表と同じ。

(注) ① 「構成比」は総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡数」は年中央人口10万人あたりの死亡者数、つまり心臓疾患死亡者数である。

② 「5カ年平均」の場合の「構成比」は平均総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡数」は平均年中央人口10万人あたりの平均死亡者数である。

第19表 地区別心臟疾患死亡者数

年次	三			春			沢			石			要			田			御			木			
	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	
昭和36年	6	○10.0	65.3	3	○13.0	128.6	0	16.7	292.8	0	0	21.1	0	0	173.8	0	0	269.2	0	0	0	0	0	0	0
37	11	○16.7	120.9	7	○38.9	300.7	4	20.0	225.9	4	4	35.3	4	6	173.8	4	6	269.2	6	6	0	0	0	0	0
38	6	○9.1	66.4	1	○3.7	45.1	3	3.7	177.7	3	3	177.7	0	0	177.7	0	0	177.7	0	0	0	0	0	0	0
39	11	○17.2	122.7	5	○25.0	227.5	3	○15.8	177.7	3	3	177.7	0	0	177.7	0	0	177.7	0	0	0	0	0	0	0
40	10	○12.2	111.9	0	○0	0	2	7.7	116.6	2	2	116.6	0	0	116.6	0	0	116.6	0	0	0	0	0	0	0
41	9	○13.6	102.0	1	6.7	46.0	3	○13.6	174.2	1	1	174.2	1	1	5.6	1	1	46.3	1	1	0	0	0	0	0
42	9	○18.0	103.1	6	○37.5	281.6	1	7.1	58.3	3	3	16.7	3	3	141.8	3	3	193.7	3	3	0	0	0	0	0
43	8	○16.7	93.3	4	○16.7	189.8	6	20.7	347.6	4	4	21.1	4	4	193.7	4	4	48.9	4	4	0	0	0	0	0
44	7	○12.1	83.2	3	○16.7	145.4	4	○13.8	235.7	1	1	4.0	1	1	48.9	1	1	48.9	1	1	0	0	0	0	0
45	8	○14.5	95.9	3	○23.1	149.5	5	25.0	294.6	5	5	6.3	5	5	49.9	5	5	49.9	5	5	0	0	0	0	0
46	11	○22.0	134.9	2	○13.3	105.5	2	10.0	119.8	2	2	11.8	2	2	94.7	2	2	94.7	2	2	0	0	0	0	0
47	12	○23.5	151.1	3	16.7	160.5	4	23.5	243.2	2	2	18.2	2	2	95.9	2	2	95.9	2	2	0	0	0	0	0
48	13	○24.5	166.5	3	14.3	161.8	1	5.0	62.5	3	3	14.3	3	3	141.2	3	3	141.2	3	3	0	0	0	0	0
49	12	○25.5	156.3	3	12.5	162.9	2	8.7	126.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
50	14	○23.0	182.4	2	9.5	108.5	7	29.2	451.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
51	9	○19.6	119.3	2	9.5	112.5	1	4.2	63.5	1	1	8.3	1	1	47.9	1	1	47.9	1	1	0	0	0	0	0
52	10	○19.6	133.0	1	6.7	56.3	2	11.8	127.0	3	3	23.1	3	3	143.5	3	3	143.5	3	3	0	0	0	0	0
5方年平均	8.8	○13.0	97.3	3.2	○15.8	142.7	2.4	○12.2	160.7	2.0	2.0	○13.0	2.0	2.0	89.2	2.0	2.0	89.2	2.0	2.0	0	0	0	0	0
36~40	8.2	○14.8	95.6	3.4	○19.8	162.2	3.8	○16.7	222.0	2.0	2.0	○10.4	2.0	2.0	96.3	2.0	2.0	96.3	2.0	2.0	0	0	0	0	0
41~45	12.4	○23.7	157.9	2.6	○13.1	139.7	3.2	○15.4	198.7	1.4	1.4	9.3	1.4	1.4	66.7	1.4	1.4	66.7	1.4	1.4	0	0	0	0	0
昭和36年	4	○8.7	120.8	1	4.0	53.1	1	5.6	62.9	15	15	7.5	15	15	68.3	15	15	68.3	15	15	0	0	0	0	0
37	3	○8.1	92.4	2	8.3	106.3	3	○33.3	191.2	34	34	17.3	34	34	156.1	34	34	156.1	34	34	0	0	0	0	0
38	2	○5.6	63.3	2	○11.1	108.6	0	0	0	20	20	10.3	20	20	99.6	20	20	99.6	20	20	0	0	0	0	0

39	5	○16.1	○159.8	1	5.0	55.9	3	○25.0	○197.5	28	15.6	130.3
40	3	○14.3	○97.4	4	○16.7	○230.5	1	9.1	○66.9	20	10.2	94.0
41	1	3.7	33.4	1	6.3	59.5	1	○14.3	67.4	17	9.9	80.8
42	3	10.3	102.0	2	10.5	121.7	2	14.3	○134.9	26	16.3	125.2
43	1	5.0	34.1	2	13.3	○125.2	0	○6.7	69.9	25	15.1	122.3
44	5	○20.8	○172.8	1	7.7	63.7	1	○36.4	○279.7	22	12.1	109.4
45	3	○37.5	104.0	1	7.1	63.9	4	○16.3	128.8	25	16.3	125.5
46	1	3.3	36.2	1	5.3	66.7	1	○14.7	69.1	20	12.7	102.4
47	5	14.7	○184.9	2	14.3	137.1	3	10.0	68.8	29	18.4	151.4
48	4	14.3	151.6	3	○23.1	○209.4	3	○25.0	○204.6	30	17.9	158.6
49	6	○21.4	224.6	1	9.1	70.0	5	○41.7	○336.2	29	19.0	154.2
50	5	17.9	○183.2	4	○25.0	○281.7	2	16.7	128.8	34	19.1	180.5
51	2	8.0	73.8	3	○30.0	○208.0	5	○31.3	○294.3	23	14.9	122.0
52	2	14.3	73.4	3	○20.0	○206.2	3	○23.1	○168.5	24	17.4	126.9
5カ年平均												
36~40	3.4	9.9	106.7	1.0	4.5	54.8	1.6	○12.3	103.6	23.4	12.1	108.5
41~45	2.6	10.5	88.8	1.4	9.1	86.8	1.6	○13.8	109.9	23.0	13.8	112.4
46~50	4.2	14.0	○153.5	2.2	15.1	○151.9	2.4	○22.6	○162.0	28.4	17.4	149.1

(資料) 三春町民生課資料より作成。

(注) ①「構成比」は地区別の総死者数にたいする構成比(%)である。

「死亡数」は地区別の各年中央人口10万人あたりの死亡者数、つまり心臓疾患死亡数である。

②「5カ年平均」の場合の「構成比」は平均総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡数」は平均中央人口10万人あたりの平均死亡者数である。

③○印は全町平均よりも高いことを示す。

	三春	沢石	栗田	御木沢	中郷	中妻	岩江
「構成比」が全町平均をこえる年数	13	8	8	5	6	6	9
「死亡数」	9	10	12	5	7	7	8

第20表 悪性新生物(癌)死についての全体比較

年次	全		国		福 島		県		田 村		郡		三 春		町	
	死亡数	構成比	死亡数	死亡率	死亡数	構成比	死亡数	死亡率	死亡数	構成比	死亡数	死亡率	死亡数	構成比	死亡数	死亡率
昭和36年	96,442	13.3	102.3	110.9	2,194	13.1	107.8	124.5	89	10.7	95.7	20	18	16.8	164.0	10.2
37	98,224	13.8	103.2	113.0	2,196	13.1	108.8	124.4	89	10.7	95.7	20	16	6.5	74.0	16.8
38	101,426	15.1	105.5	114.6	2,280	14.7	113.4	125.8	97	11.3	110.3	22	25	12.1	117.0	16.8
39	104,324	15.5	107.3	116.2	2,286	14.8	114.2	127.0	108	12.1	115.1	25	26	13.8	121.0	15.6
40	106,536	15.2	108.4	116.3	2,328	14.5	117.4	129.0	80	8.9	84.7	18	18	8.5	84.5	15.3
41	109,805	16.4	110.9	117.7	2,455	16.4	124.5	134.3	89	10.7	95.7	20	20	10.2	95.1	10.2
42	112,593	16.7	113.0	118.1	2,448	16.3	124.4	136.1	119	14.2	129.5	31	31	16.8	149.3	16.8
43	115,462	16.8	114.6	118.4	2,465	16.1	125.8	143.4	100	11.6	110.3	22	22	11.7	107.6	11.7
44	118,559	17.1	116.2	122.2	2,483	16.3	127.0	142.9	103	12.7	115.1	35	35	15.6	173.8	15.6
45	119,977	17.5	116.3	122.6	2,510	16.0	129.0	142.5	99	10.4	112.1	26	26	15.3	170.1	15.3
46	122,850	18.0	117.7	122.2	2,519	17.2	129.7	142.5	117	16.0	134.3	30	30	16.9	153.4	16.9
47	127,299	17.9	120.4	122.2	2,631	18.1	136.1	142.5	101	14.4	117.7	26	26	15.6	135.7	15.6
48	130,964	18.4	121.2	122.2	2,777	18.4	143.4	142.9	116	15.8	137.1	34	34	18.9	179.7	18.9
49	133,751	18.8	122.2	122.2	2,782	18.5	142.9	142.5	126	17.5	150.2	32	32	18.8	170.1	18.8
50	136,383	19.4	122.6	122.6	2,808	19.0	142.5	142.5	93	13.2	111.6	28	28	15.2	148.5	15.2
51	140,840	19.9	125.3	125.3	2,784	18.9	140.9	143.0	123	18.0	148.4	33	33	20.1	175.1	20.1
52	145,772	21.1	128.4	128.4	2,845	20.1	143.0	143.0	109	16.2	131.7	30	30	19.4	158.6	19.4
5カ年平均	101,390.4	14.7	105.4	117.7	2,256.8	14.0	112.3	129.7	95.6	10.4	99.3	24.2	24.2	11.3	112.3	10.4
36~40	115,279.2	16.8	114.2	120.4	2,452.2	16.1	125.1	136.1	102.0	11.9	112.5	26.8	26.8	13.9	131.0	11.9
41~45	130,249.4	18.6	120.7	122.2	2,703.4	18.3	139.0	142.5	110.6	15.4	130.2	30.0	30.0	17.1	157.4	15.4

(資料) 第16表と同じ。

(注) ① 「構成比」は総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡率」は年中央人口10万人あたりの死亡者数,つまり悪性新生物(癌)死亡率である。

② 「5カ年平均」の場合の「構成比」は平均総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡率」は平均年中央人口10万人あたりの平均死亡者数である。

につく。すなわち、三春は死亡者中の構成比において高く（中枢神経系血管損傷が低いため）て対人口比死亡率で低いのにたいして、要田は死亡者中の構成比で低く（中枢神経系血管損傷が高いため）て対人口比死亡率で高くなっている。しかし、この死亡原因については、いずれにしろ沢石、要田、中郷などの農業地域において高死亡率が示されている。これは、すでに指摘した農家の食生活とのかかわりが予想されるものである。

そこで、第22表によって癌の種類別死亡者数をみると、一見して明らかのように、胃癌が圧倒的に多く、癌死亡者のじつに四〇%に及んでいる。つづいて肝臓癌が約一〇%をしめ、さらに肺癌、直腸癌、癌性腹膜炎、食道癌などもほぼ毎年記録されている。

そして、胃癌死亡だけを今一度整理したのが第23表および第24表である。地区別にみた絶対数は必ずしも多くはないので、あまり厳密なことはいえないが、癌死亡者中にしめる割合では、中妻、中郷、御木沢が高く、総死亡者中にしめる構成比では中郷、御木沢が高く、胃癌死亡率でも中郷、御木沢が高くなっている。また、この三指標のいずれについても三春の低さが目立っている。つまり、胃癌死亡については、癌死亡一般以上に純農村部への片寄りがみられる。いずれにしても、胃癌死亡をふくめた消化器系の癌死亡が過半をしめていることを考えると、癌死亡のこうした動向は、丘陵地農業を中心とした住民の労働・生活様式と深い関連があるように思われる。

最後に、前節の終りで検討した乳児死亡について、今度はその死亡原因を検討しよう。第25表をみると、全体として虚弱、未熟、早産など、なかば先天的な原因に直接起因すると思われる乳児死亡がきわめて多い。また、個別の死亡原因では肺炎が圧倒的に多く、表注にみるように、三〇年代後半には乳児死亡総数の四四・六%、四〇年代前半には三七・二%、四〇年代後半には二二・二%をしめている。同時に、近年の乳児死亡の急速な減少のなかで、肺炎死の減少割合は乳児死亡全体の減少割合よりも大きくなっている。したがって、この間の高い乳児死亡の直接最大の原因が肺炎死であった

第21表 地区別恶性肿瘤死亡者数

年次	三			春			石			粟			田			御			木		
	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率	数	構成比	死亡率
昭和36年	11	○18.3	119.8	3	13.0	128.6	1	7.1	73.1	3	○23.1	130.2	4	○11.1	94.6	4	○23.5	189.5	4	○23.5	189.5
37	4	○6.1	44.0	1	○5.6	43.0	1	4.2	73.2	1	○5.3	43.4	2	○11.1	94.6	2	○27.3	144.2	3	○27.3	144.2
38	8	○13.6	99.6	5	○18.5	225.4	0	○	○	3	○17.6	134.6	3	○6.9	115.9	3	○10.0	141.2	3	○14.3	141.2
39	9	○12.5	89.3	3	○15.0	136.5	2	○10.5	119.9	0	○	○	1	○10.3	176.8	1	○13.0	189.0	1	○8.3	47.3
40	6	7.3	67.1	2	○11.8	93.5	2	7.7	116.6	1	6.7	45.9	3	○4.2	58.9	3	4.2	64.5	3	○21.4	145.6
41	8	○12.1	90.7	1	6.7	46.0	0	○	○	0	○	○	0	○	○	0	○	○	0	○	○
42	7	○14.0	80.2	1	6.3	46.9	4	○28.6	233.2	2	11.1	94.6	2	○15.8	145.3	2	○5.9	60.8	3	○15.8	145.3
43	0	○	○	1	4.2	47.5	2	6.9	115.9	3	○15.8	145.3	3	○10.3	176.8	3	13.0	189.0	3	○14.3	141.2
44	7	○12.1	83.2	2	○11.1	96.9	3	5.0	58.9	1	4.0	48.9	1	5.0	58.9	1	4.2	64.5	1	4.2	64.5
45	5	9.1	60.0	2	○15.4	99.7	1	10.3	58.9	1	6.3	48.9	1	5.0	58.9	1	4.2	64.5	1	4.2	64.5
46	7	14.0	85.8	3	○20.0	158.2	3	○15.0	179.6	4	○23.5	189.5	4	○15.0	179.6	4	○15.0	179.6	4	○23.5	189.5
47	7	13.7	88.1	3	○16.7	160.5	1	5.9	60.8	3	○27.3	144.2	3	○10.0	141.2	3	13.0	189.0	3	○14.3	141.2
48	10	○18.9	128.1	3	○14.3	161.8	2	13.0	189.0	1	8.3	47.3	1	13.0	189.0	1	4.2	64.5	1	4.2	64.5
49	5	10.6	65.1	3	○12.5	162.9	3	4.2	64.5	3	○21.4	145.6	3	○10.3	176.8	3	13.0	189.0	3	○14.3	141.2
50	7	11.5	91.2	3	○14.3	162.8	1	4.2	64.5	3	○21.4	145.6	3	○10.3	176.8	3	13.0	189.0	3	○14.3	141.2
51	8	17.4	106.1	3	14.3	168.7	6	○25.0	378.1	4	○33.3	191.5	4	○15.8	145.3	4	○15.8	145.3	4	○15.8	145.3
52	8	15.7	106.4	5	○33.3	281.5	1	5.9	63.5	2	15.4	95.7	2	○15.8	145.3	2	○15.8	145.3	2	○15.8	145.3
5カ年平均																					
36~40	7.6	○10.9	84.0	2.8	○13.9	124.8	1.2	6.1	80.4	1.6	○10.4	71.4	1.6	6.1	80.4	1.6	6.1	80.4	1.6	6.1	80.4
41~45	5.4	○9.7	63.0	1.4	8.1	66.8	2.8	○12.3	163.6	1.4	7.3	67.4	1.4	7.3	67.4	1.4	7.3	67.4	1.4	7.3	67.4
46~50	7.2	13.7	91.7	3.0	○15.2	161.2	2.0	9.6	124.2	2.8	○18.7	133.4	2.8	9.6	124.2	2.8	9.6	124.2	2.8	9.6	124.2
年次	中			郷			中			妻			岩			江			計		
昭和36年	10	○21.7	302.1	0	4.2	53.4	3	○16.7	188.8	31	15.6	141.1	31	15.6	141.1	9	4.6	41.3	9	4.6	41.3
37	1	2.7	30.8	1	○16.7	162.9	0	○	○	23	11.9	107.7	23	11.9	107.7	23	11.9	107.7	23	11.9	107.7
38	1	2.8	31.6	3	○16.7	162.9	2	○13.3	128.9	23	11.9	107.7	23	11.9	107.7	23	11.9	107.7	23	11.9	107.7

39	2	6.5	63.9	2	10.0	111.8	1	8.3	65.8	18	10.1	88.8
40	3	○14.3	○97.4	0				○9.1	66.9	15	7.7	70.5
41	2	7.4	○66.8	2	○12.5	○118.9	0	7.1	67.4	13	7.6	61.8
42	2	6.9	○68.0	1	5.3	60.8	1	18.2	137.9	18	11.3	86.7
43	3	○15.0	○102.4	2	○13.3	○125.2	2	6.7	69.9	19	7.8	63.6
44	4	○16.7	○138.3	1	7.7	63.7	1			13	10.4	94.0
45	3	○12.5	○104.0	2	○15.4	○127.7	0			14	9.2	70.3
46	4	13.3	○145.0	1	5.3	66.7	1	14.3	69.1	23	14.6	117.7
47	5	14.7	○184.9	1	7.1	68.5	4	○40.0	○275.3	24	15.5	125.3
48	2	7.1	○75.8	1	7.7	69.8	1	8.3	68.2	22	13.1	116.3
49	8	○28.6	○299.5	1	9.1	70.0	3	○16.7	○134.5	23	14.6	122.3
50	6	○20.0	○219.9	1	6.3	70.4	2	○25.0	○193.2	24	13.5	127.4
51	1	4.0	36.9	2	○20.0	138.7	5	○31.3	○294.3	29	18.8	153.9
52	3	○21.4	110.1	3		○206.2	2	15.4	112.4	24	17.4	126.9
5カ年平均												
36~40	3.4	9.9	106.7	1.2	5.4	65.8	1.4	○10.8	○90.6	19.2	9.9	89.0
41~45	2.8	○11.3	○95.6	1.6	○10.4	○99.3	0.8	○6.9	○55.0	15.4	9.3	75.3
46~50	5.0	○16.7	185.2	1.0	6.8	60.7	2.2	○20.8	○148.5	23.2	14.2	121.8

(資料) 三春町民生課資料より作成。

(注) ① 「構成比」は地区別の総死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡率」は地区別の各年中央人口10万人あたりの死亡者数、つまり悪性新生物死亡率である。

② 「5カ年平均」の場合の「構成比」は平均死亡者数にたいする構成比(%)である。

「死亡率」は平均年中央人口10万人あたりの平均死亡者数である。

③ ○印は全町平均よりも高いことを示す。

三春 沢石 栗田 御木沢 中郷 中妻 岩江

「構成比」が全町平均をこえる年数 8 12 4 9 9 7 8
「死亡率」 " 4 13 11 9 10 7 7

子宮癌	癌腫性腹水	癌性肋膜炎	癌性腹膜炎	骨髄肉腫	悪液質	外陰部ヒソ瘡	その他	計
2	1	1	1				骨肉腫肺移転 1	31
1					2			9
								23
								18
								15
1			1				胆道癌 1	13
1			1				大腿部骨肉腫 1	18
			1				頸部癌 1	13
			5				鎖骨リンパ腫 1	19
			3		1	1	腰椎癌移転 1, 癌性悪液質肺炎 1	14
			3				肺腫瘍1, 耳下腺癌1, 前立腺癌1, 食道静脈癌1	23
			1		1		甲状腺癌1, 睾丸癌1, 腸癌および癌性腹膜炎1	24
1			4	1			上肢癌1, 乳癌移転1, 細網肉腫1, 悪性リンパ腫1	22
1			2	1			前立腺癌1, 腹腔内軟部肉腫1	23
							(注)参照	24
					2		(注)参照	29
			2		1		(注)参照	24
								96
2			11		1	1		77
2			10	2	1			116

廻盲部癌 1, 腸管膜奇型腫 1, 急性白血病 1

ウィルム腫瘍 1, 肝腫 1

第22表 癌の種類別死亡者数

年次	食道癌	胃癌	結腸癌	直腸癌	肺癌	肝癌	幽門部癌	噴門部癌	膵臓癌	胆嚢癌	腎臓癌	膀胱癌
昭和36年	3	15	1	2	3					2		
37	1	3		3				1				
38												
39	1	9		1	1	1			1			1
40	2	7		1	1	2						
41	1	3			1	3		1				1
42	1	6		1	1	6						
43		8		1	1		1					
44	1	8		2	1				1			
45		6		1								
46		6		1		1				1	1	
47	2	11		1	1	2				1 +胆道		
48		7	1	1		3						
49	1	9	1	1	2	2						
50	1	9		1	3	3						
51	1	11		1	2	2		1		1		1
52	2	8			3	2						
5カ年集計												
36~40												
41~45	3	31		5	4	9		1	1			1
46~50	4	42	2	5	6	11				2	1	

(資料) 三春町民生課資料より作成。ただし昭和38年については内訳不詳。

(注) 昭和50年「その他」内訳=胆管癌1, 肛門リンパ節癌1, 悪性リンパ腫1,
 51年 // =胆道癌1, 肝細胞癌1, 前立腺癌1, 廻盲部癌1,
 52年 // =白血病3, 前立腺癌1, 胆道腫瘍1, 大腿肉腫1

第23表 地区別胃癌死亡者数

年次	三春	沢石	要田	御木沢	中郷	中妻	岩江	計			
								計	(A) 割合	(B) 構成比	(C) 死亡率
昭和36年								15	48.4	7.5	68.3
37	1			1	1			3	33.3	1.5	13.8
38											
39	4	2	1		1	1		9	50.0	5.0	41.9
40	3		1	1	2			7	46.7	3.6	32.9
41	1				1	1		3	23.1	1.8	14.3
42	3			1	1	1		6	33.3	3.8	28.9
43		1	1	2	2	2		8	61.5	4.8	39.1
44	3		1	1	2	1		8	42.1	4.4	39.8
45	1	1	1		2	1		6	42.9	3.9	30.1
46	2	2		1	1			6	26.1	3.8	30.7
47	3	1		2	2	1	2	11	45.8	7.1	57.4
48	5		2					7	31.8	4.2	37.0
49		1	2	1	3	1	1	9	39.1	5.7	47.9
50	2		1	2	3		1	9	37.5	5.1	47.8
51	1	1	4	2			3	11	37.9	7.1	58.4
52								8	33.3	5.8	42.3
5カ年集計											
35~40											
41~45	8	2	3	4	8	6	0	31	40.3	3.2	30.3
46~50	12	4	5	6	9	2	4	42	36.2	5.1	44.1

— 三春町における医療・保健問題 —

(資料) 三春町民生課資料より作成。

(注) 「(A)割合」は癌死亡者総数にたいする割合(%)である。
 「(B)構成比」は総死亡者数にたいする胃癌死亡者数の構成比(%)である。
 「(C)死亡率」は年央人口10万人あたりの胃癌死亡者数である。

第24表 地区別胃癌死亡動向(5カ年平均)

		三春	沢石	要田	御木沢	中郷	中妻	岩江	計
35~40年 平均	死亡者数							0	6.2
	(A) 割合								40.3
	(B) 構成比								3.2
41~45年 平均	死亡者数	1.6	0.4	0.6	0.8	1.6	1.2	0	6.2
	(A) 割合	29.6	28.6	21.4	57.1	57.1	75.0		40.3
	(B) 構成比	2.9	2.3	2.6	4.2	6.5	7.8		3.2
46~50年 平均	死亡者数	2.4	0.8	1.0	1.2	1.8	0.4	0.8	8.4
	(A) 割合	33.3	26.7	50.0	42.9	36.0	40.0	36.4	36.2
	(B) 構成比	4.6	4.0	4.8	8.0	6.0	2.7	7.5	5.1
	(C) 死亡率	30.6	43.0	62.1	57.2	66.7	27.6	54.0	44.1

(資料) 三春町民生課資料より作成。

(注) ① 「(A)割合」は平均癌死亡者総数にたいする平均胃癌死亡者数の割合(%)である。
 「(B)構成比」は平均総死亡者数にたいする平均胃癌死亡者数の構成比(%)である。
 「(C)構成比」は平均年央人口10万人あたりの平均胃癌死亡者数である。

②昭和36~40年平均は資料が不完全なため算出できなかった。

第25表 原因別乳児死亡数（三春町）

年次	先虚	新メ	早産	未熟	生沈	先不	先心	新黄	奇	先白	胃腸	気管・上	肺	肝硬	
	天性	生レ	児ナ	児	力衰	天発	疾全	生児	型	血天	病	支炎	気道	変	
昭和36年	* 1			5	1			1			◎ 1		16		
37		3		3	1				1				9		
38				5	1	1	1	2				1	11		
39								4			1	1	4		
40		1		3				1			2		4		
41	2	1										2	4		
42	3												6		
43			1	1									1		
44	1	1		1	1						1		3		
45				1		1							2		
46	3	1		1							1		2	1	
47		1	1										1		
48											1		1		
49					1					1			1		
50													1		
51				1			1			1		1			
52															
年次	心臓	髄膜	白血	脳炎	頭内	口内	窒	呼吸	火co	麻	感	消化	栄養	脱水	計
	病	病	病	炎	蓋血	炎	息	困難	傷中	疹	冒	不良	失調	症	
昭和36年												1	1		27
37	1						2					1	2		23
38							2			1					25
39							1					1			12
40	1						1						1		14
41						1	1	1							12
42															9
43							1	1							5
44	2	1	1				1								12
45														1	5
46								1							9
47	1							1				1			7
48															4
49									2			1			4
50		白	1								1	1			4
51					1										2
52															4

(資料) 三春町民生課資料より作成。

(注) ①*は「仮死状態蘇生せず」、◎は「直腸膿瘍」（いずれも昭和36年）。

	肺炎	指数	構成比(%)	計	指数	構成比(%)
② 36~40年平均	8.8	100.0	44.6	20.2	100.0	100.0
41~45年平均	3.2	37.2	37.2	8.6	42.6	100.0
46~50年平均	1.2	13.6	22.2	5.4	26.7	100.0

第26表 肺炎による乳児死亡数

年次	三春	沢石	者田	御木沢	中郷	中妻	岩江	計
昭和36年								16
37	1		3		1	4		9
38	3	1	1		4	2		11
39				2	2			4
40	1		1			1	1	4
41		1	1	1	1			4
42				2	3	1		6
43			1					1
44		2		1				3
45				1			1	2
46	1		1			1		2
47					1			1
48								1
49			1					1
50			1					1
51		1						1
52								0

(資料) 三春町民生課資料より作成。ただし昭和36年については内訳不詳。

三 疾病動向についての若干の検討

死亡動向につづいて、疾病動向をとりあげることが当然の順序であろう。しかし、これを統計的に分析、把握することは多分に困難をとまなざるをえない。なぜなら、何よりもまず、全住民を対象とした疾病動向の記録が短期的にも長期的にも存在しないという初歩的な事実につきあたるからである。そのうえで、さしあたり利用可能なのは、自治体が管理する国民健康保険に関するものにすぎない。しかも、この国保資料そのものにも大きな制約がある。その第一は、この国保が被保険者として把握する佳民の限定性である。つまり、福島県民の五〇%弱、田村郡佳民の三分の二、そして三春町民の五五%程度が国保被加入者（被保険者）として把握され、かつ疾病統計の対象とされているにすぎず、残りの部分について

とともに、この肺炎死の急速な減少が乳児死亡の減少の重要な要因であったことがわかる。そして、この肺炎による乳児死亡を地区別にみたのが第26表であるが、要田、御木沢、中郷、中妻で多く、岩江、三春で少ないことが示されている。かくして、純農村部において肺炎をふくむ乳児死亡率が高く、逆に市街地ないし住宅地化地域では低かったことが再確認されよう。

てはこれを承知する手段を欠いている。また、これによって検討が可能となるのは、農家や郡市の自営業者とその家族であり、これらは他の医療保険の対象者とはちがった疾病構造を示すことになるであろう。さらに、たんに対象者の職業の限定性だけではなく、国保被加入者の年齢構成は、他の医療保険に比べて高齢者と年少者の比重が非常に大きくなっており、この点でも他とはちがった疾病構造を示すはずである。したがって、いずれにせよ、国保統計の分析によって全住民の状態を代表させることは、かなりの無理があるといわねばならないであろう。

第二に、国保の疾病統計に示される罹病率は、国保適用の医療機関が診療した国保被加入者（被保険者）に関する件数割合にすぎない。この場合、ある被保険者が新来患者として受診すれば、その時点で一件を構成し、別の診療科目に回されれば件数がふえ、さらに入院ということになれば件数がふえ、月をこえると件数がふえる。転院の場合も同様である。つまり、一人の患者がある種の病気一つによって、統計上は数件を構成することにもなり、ここに数字の魔術が生ずることにもなる。

第三に、国保の疾病統計の分類基準が幾度か変更され、したがって、長期にわたる比較検討が非常に困難になっていることである。

そのうえ第四に、福島県国民健康保険団体連合会による国保疾病統計の刊行は、昭和三八―四五年に関する『国保の疾病』（各年版）から、四八年五月分と四九年五月分に限った『福島県国民健康保険疾病分類統計表（社会保険表章用八八項目疾病分類表）』（各一冊）へと縮小され、その後はこの種の刊行自体が停止されている。つまり、五月分への限定は、それが年間を通じた平均を示しているという経験法則から説明され、また、統計の刊行停止については、毎年の傾向数値にほとんど変化がみられないという経験法則と、日常の尠大な国保事務にプラスした刊行作業と刊行経費の大変さが主張されている。

ともあれ、こうした資料的制約にもかかわらず、他にかわるべき手段がない以上は、国保統計に依拠しつつ、三春町住民の疾病動向について何がしかの把握を試みることにしよう。

第27表は、国保が把握する昭和四九年五月診療分に関する疾病群（大分類）別の罹病状況である。これを前年同月診療分とも対比しながら検討すると、さしあたり次の点が指摘できる。第一に、罹病率（受診率）については福島県V三春町V田村郡という序列にあることである。こうした序列は医療機関利用上の難易度との関連を予想させる（第四節を参照）が、さしあたり三春町の罹病率順位は九〇市町村中四二位（四八年五月）と六五倍（四九年五月）となっている。第二に、疾病群別の比較では、循環器系疾患、呼吸器系疾患、そして消化器系疾患が、いずれにおいても三大疾病群をなしており、この三者の合計がつねに全体の六〇%台をしめている。

そこで今度は、これらの三大疾病群の各々を検討してみよう。

まず、第28表にみるように、循環器系疾患（大分類）は、さらに七種の疾病に小分類されているが、なかでも高血圧性疾患はこの疾病群中の七〇%程度をしめるとともに、八八項目疾病分類（小分類）中でもっとも高い罹病率を示している。また、前節でみた中枢神経系血管損傷死と関連する脳血管疾患も上位をしめている。次に、第29表によって呼吸器系疾患をみると、ここでは急性呼吸器系感染が圧倒的に多く、この疾病群中の三分の二から四分の三をしめ、八八項目疾病分類中でも第二位の件数となっている。さらに、消化器系疾患では、第30表のように、「歯および歯の支持組織の疾患」がこの疾病群中の過半をしめるとともに、八八項目疾病分類中の第三位となっている。さらに、「その他の胃および十二指腸の疾患」が、この疾病群中のおよそ四分の一、かつ八八項目中の第四位をしめている。

したがって、以上の三大疾病群の比率が高いのは、じつは各々のうちに高罹病率の疾病をふくんでいるためであることがわかる。そこで次に、八八項目疾病分類によって高罹病率の疾病をひろくと第31表のようになる。ここでは、福島県全

体について、一万件以上の疾病を罹病率順に配列し、同時にそれが田村郡、三春町でしめる順位と比重を示している。一見して明らかのように、第一位から第四位までは県、郡、町ともに同一であり、さらに、第一位までにふくまれる疾病等も同一であることがわかる。

そして、農家や自営業者を対象とする国保が把握する疾病のうち、もっとも罹病率の高いのが高血圧性疾患であり、これを年齢階層別に集計したのが第32表である。三春町について目立つのは、全体として五〇才以上層全体の罹病率が高くなかで、とりわけ七〇才以上層の罹病率が高いことである。また、地域の成人病対策として町役場が行なってきた血圧検査の結果を示したのが第33表である。多分に要注意年齢層を対象とした検査であるとはいえ、相当の「有症率」である。しかし、実際に医者診療を受けて国保統計の罹病率を構成するのは、その数分の一にすぎない。

そして最後に、それ自体は疾病ではないが、いわゆる農夫症にふれておかねばならない。福島県厚生農協連・農村医学研究所のパンフレットによると、「農夫症は主に疲労の蓄積、各種環境からくる精神不安、栄養欠陥、冷えなどからなるといわれ、病気の前ぶれで放置しますと心臓病、高血圧、関節リウマチなどの病気になります」とあり、具体的には、①肩こり、②腰痛、③手足のしびれ、④夜間多尿、⑤めまい、⑥息ぎれ、⑦不眠、⑧腹はりの八症状中の各々について、「いつもある」を二点、「ときどきある」を一点とし、合計点数〇～二点を正常、三～六点を要注意、七点以上を要措置としている。そこで、農村医学研究所が町内各農協と協力して行なった九回の巡回診療結果から、農夫症得点調査を集計してみた。まず、第34表によって実施単位ごとの記録をみると、いずれの場合も婦人に高得点者（三点以上が有症者）が多いことがわかる。また、これを年齢階層別に再集計したのが第35表である。ここでもまた婦人の有症率が高いこと、さらには五〇才代、六〇才代の有症率が高いこと（七〇才以上層も有症率が高いが受診者の絶対数が少ない）がわかる。そして、このような傾向は県内のどの方部についてもほぼ共通したものであり、その意味で、農夫症は何よりもまず農婦

第27表 疾病類別罹患状況

(昭和49年5月診療分)

疾 病 分 類 (大 分 類)	福 島 県		田 村 郡		三 春 町		県 内 位
	件 数	構成比 罹患率	件 数	構成比 罹患率	件 数	構成比 罹患率	
1 伝染病および寄生虫病	15,006	3.7	622	3.2	124	3.0	65
2 新生物	4,127	1.0	184	1.0	41	1.0	54
3 内分泌栄養および代謝の疾患	4,514	1.1	194	1.0	32	0.7	66
4 血液および造血器の疾患	1,018	0.2	54	0.3	11	0.3	34
5 精神障害	5,253	1.3	284	1.5	52	1.2	42
6 神経系および感覚器の疾患	43,654	10.6	1,959	10.0	472	11.4	45
7 循環器系の疾患	92,376	22.5	4,567	23.3	1,024	24.6	49
8 呼吸器系の疾患	77,004	18.7	3,838	19.6	903	21.7	28
9 消化器系の疾患	85,294	20.7	4,159	21.2	833	20.0	62
10 泌尿器系の疾患	10,907	2.7	454	2.3	73	1.7	80
11 妊娠分娩および産褥の合併症	2,605	0.6	132	0.7	33	0.8	11
12 皮膚および皮下組織の疾患	18,283	4.5	784	4.0	169	4.0	60
13 筋骨格系および結合織の疾患	30,099	7.3	1,432	7.3	229	5.5	87
14 先天異常	1,167	0.3	46	0.2	13	0.3	29
15 周産期疾病および死亡の主要原因	176	0.0	28	0.2	1	0.0	43
16 症状および診断不明確の状態	4,489	1.1	123	0.6	29	0.7	71
17 不慮の事故・中毒および暴力	15,227	3.7	712	3.6	124	3.0	79
計	411,199	100.0	19,572	100.0	4,165	100.0	65
国保被加入者数 (加入率)	968,922 (49.9%)	424.4	55,934 (66.7%)	349.9	10,810 (57.4%)		

(資料) 福島県国民健康保険団体連合会『福島県国民健康保険疾病統計分類表』(昭和49年5月診療分)より作成(以下では福島県国民健康連合会『福島県国民健康統計表』(昭49.5)と略称する)。
 (注) ①「構成比」は総件数にたいする各疾病群(1~17)の件数比率(%)である。

- ②「罹病率」は国保被保険者1,000人あたりの件数比であり、さしあたりは受診率にすぎない。ただし、計は必ずしも上段の合計値とはなっていない。
- ③以上のような作表手続のため、「件数」「構成比」「罹病率」は各々の倍率で比例対応関係にある。
- ④三春町の「県内順位」は県内90市町村中における各疾病群ごとの罹病率順位である。

第28表 循環器系疾患の内訳

(昭和49年5月診療分)

7 循環器系の疾患	福島県			田村郡			三春町		
	件数	構成比	罹病率	件数	構成比	罹病率	件数	構成比	罹病率
41 活動性リウマチ熱	199	0.2	0.2	4	0.1	0.1	1	0.1	0.1
42 慢性リウマチ性疾患	295	0.3	0.3	8	0.2	0.1	1	0.1	0.1
43 高血圧性疾患	64,071	69.4	66.1	3,353	73.4	59.9	710	69.3	65.7
44 虚血性心疾患	4,256	4.6	4.4	180	3.9	3.2	46	4.5	4.3
45 脳血管疾患	12,453	13.5	12.9	573	12.6	10.2	164	16.0	15.2
46 静脈血栓症および塞栓症	185	0.2	0.2	2	0.0	0.0	0		
47 その他の循環器系の疾患	10,917	11.8	11.3	447	9.8	8.0	102	10.0	9.4
小計	92,376	100.0	95.3	4,567	100.0	81.6	1,024	100.0	94.7
全疾病等	411,199		424.4	19,572		349.9	4,165		385.3
国保被加入者数(加入率)	963,922 (49.9%)			55,934 (66.7%)			10,810 (57.4%)		

(資料) 第27表に同じ。

- (注) ①「構成比」は当該疾病群内での割合(%)である。
- ②「罹病率」は国保被加入者1,000人あたりの件数比である。ただし、小計は必ずしも上段の合計値とはなっていない。
- ③「(県内・郡内・町内)順位」は社会保険表章用88項目疾病分類のうち各々第何位の件数になるかを示した。
- ④左端の数字は上記88項目における分類番号である。

第29表 呼吸器系疾患の内訳

(昭和49年5月診療分)

8 呼吸器系の疾患	福 島 県			田 村 郡			三 春 町					
	件数	構成比	羅病率 順位	件数	構成比	羅病率 順位	件数	構成比	羅病率 順位			
48 急性呼吸器系感染	58,028	75.4	59.9	2	2,827	73.7	42.9	2	607	67.2	56.2	2
49 インフルエンザ	441	0.6	0.5	56	37	1.0	0.6	51	3	0.3	0.3	52
50 肺炎	2,309	3.0	2.4	34	268	7.0	4.1	14	59	6.5	5.5	17
51 喘息	3,707	4.8	3.8	23	216	5.6	3.3	19	74	8.2	6.8	14
52 気管支炎および肺炎腫	4,150	5.4	4.3	20	133	3.5	2.0	26	72	8.0	6.7	16
53 扁桃肥大およびアデノイド	1,659	2.1	1.7	40	90	2.3	1.4	36	35	3.9	3.2	22
54 塵肺症および類似疾患	78	0.1	0.1	75	1	0.0	0.0	77	0			70
55 鼻および副鼻腔の疾患	4,014	5.2	4.2	21	136	3.5	2.1	25	31	3.4	2.9	25
56 その他の呼吸器系の疾患	2,618	3.4	2.7	30	130	3.4	2.0	28	22	2.5	2.0	30
小 計	77,004	100.0	79.5		3,838	100.0	68.6		903	100.0	83.5	
全 疾 病 等	411,199		424.4		19,572		349.9		4,165		385.3	
国保被加入者数(加入率)	968,922 (49.9%)			55,934 (66.7%)			10,810 (57.4%)					

(資料) (注) とともに第28表に同じ。

症であるといえるが、農夫症よりも農婦症が多いのは、農村婦人がその肉体的適性にそぐわない重労働に長期にわたって従事せざるをえないことや、日常生活における婦人の地位の低さなどによるであろう。阿武隈農業における婦人労働の重要な役割を認めればこそ、婦人の健康管理は一層重要である。

以上は主として国保資料を中心にして、疾病動向の一端をのぞいてきたにすぎないが、さらに、住民の四〇%をこえる人たち（国保被加入者以外の人たち）の疾病動向については、言及するに足るだけの手がかりが得られなかった。これらの人たちは、一方では同じく三春町住民として国保被加入者層と共通の問題をもち、他方ではそれぞれの属する職業や職

第30表 消化器系疾患の内訳

(昭和49年5月診療分)

	福島県			田村郡			三春町		
	件数	構成比	県内順位	件数	構成比	郡内順位	件数	構成比	町内順位
9 消化器系の疾患									
57 歯および歯の支持組織の疾患	50,160	58.8	3	2,351	56.5	3	459	55.1	3
58 消化性潰瘍	6,917	8.1	13	385	9.3	13	83	10.0	13
59 その他の胃および十二指腸の疾患	18,912	22.2	4	982	23.6	4	212	25.4	4
60 虫垂炎	1,291	1.5	43	85	2.0	38	9	1.1	45
61 腸閉塞およびヘルニア	561	0.7	53	25	0.6	55	9	1.1	45
62 胆石症および胆嚢炎	1,602	1.9	40	62	1.5	44	13	1.6	40
63 肝硬変	816	0.9	52	28	0.7	52	3	0.3	52
64 その他の肝臓の疾患	1,533	1.8	42	85	2.0	38	14	1.7	38
65 その他の消化器系の疾患	3,505	4.1	24	156	3.8	23	31	3.7	25
小計	85,294	100.0		4,159	100.0		833	100.0	
全疾病等	411,199		424.4	19,572		349.9	4,165		385.3
国保被加入者数(加入率)	968,922 (49.9%)			55,934 (66.7%)			10,810 (57.4%)		

(資料) (注) とともに第28表に同じ。

第31表 主要疾病等の順位比較

(昭和49年5月診療分)

(分類番号)	疾 病 分 類	福 島 県		田 村 郡		三 春 町							
		順位	件 数	構成比	罹病率	順位	件 数	構成比	罹病率				
(7—43)	高血圧性疾患	1	64,071	15.6	66.1	1	3,353	17.1	59.9	1	710	17.0	65.7
(8—48)	急性呼吸器系感染	2	58,028	14.1	59.9	2	2,827	14.4	50.5	2	607	14.6	56.2
(9—57)	歯および歯の支持組織の疾患	3	50,160	12.2	51.8	3	2,351	12.0	42.0	3	459	11.0	42.5
(9—59)	その他の胃および十二指腸の疾患	4	18,912	4.6	19.5	4	982	5.0	17.6	4	212	5.1	19.6
(12—77)	その他の皮膚および皮下組織の疾患	5	16,396	4.0	16.9	7	695	3.6	12.4	7	154	3.7	14.2
(13—80)	その他の筋骨格系および結合組織の疾患	6	15,484	3.8	16.0	5	767	3.9	13.7	9	105	2.5	9.7
(6—40)	神経系の疾患	7	13,554	3.3	14.0	6	750	3.8	13.4	6	157	3.8	14.5
(7—45)	脳血管疾患	8	12,453	3.0	12.9	8	573	2.9	10.2	5	164	3.9	15.2
(6—35)	眼の炎症性疾患	9	12,439	3.0	12.8	9	569	2.9	10.2	8	138	3.3	12.8
(17—88)	その他の損傷	10	11,982	2.9	12.4	10	534	2.7	9.5	11	91	2.2	8.4
(7—47)	その他の循環器系の疾患	11	10,917	2.7	11.3	11	447	2.3	8.0	10	102	2.4	9.4
全	疾 病 等		411,199	100.0	424.4		19,572	100.0	349.9		4,165	100.0	385.3
	国保被加入者数 (加入率)		968,922 (49.9%)				55,934 (66.7%)				10,810 (57.4%)		

(資料) 第27表に同じ。

(注) ①左端の「分類番号」は大分類番号(1~17, 第27表参照), 小分類番号(1~88)の順に並べて, 疾病分類表における所在を示した。

②「順位」は各々の件数のうち上位からの位置を示した。

場に規定された独自の問題（いわゆる職業病など）をもっているはずである。その全面的な把握と一元的な対策を、居住地自治体レベルでも可能にするような制度的対応が必要に思えてならない。

第32表 高血圧性疾患の年齢階層別構成 (昭和48年5月診療分)

年齢	福島県			郡			三春町		
	件数	構成比	罹病率	件数	構成比	罹病率	件数	構成比	罹病率
0~29才	404	0.7	0.9	11	0.3	0.4	1	0.1	0.1
30~39	1,384	2.3	11.7	60	1.8	9.2	10	1.4	7.4
40~49	5,689	9.4	39.7	299	9.0	36.0	63	8.5	39.8
50~59	13,327	21.9	107.3	714	21.4	108.6	157	21.3	137.4
60~69	20,598	33.9	195.5	1,025	30.7	196.1	234	31.8	259.4
70~	19,290	31.8	264.8	1,230	36.8	322.2	272	36.9	410.3
計	60,692	100.0	60.9	3,339	100.0	59.7	737	100.0	65.3
									25

(資料) 福島県国保連合会『福島県国保疾病統計表』(昭和48.5)より作成。
 (注) ①「罹病率」は各年齢階層の国保被加入者1,000人あたりの受診件数である。
 ②「県内順位」は県内90市町村中における三春町罹病率の順位である。

第33表 地区別高血圧者数

年次	三	春	沢	石	要	田	御	木	沢	中	郷	中	妻	岩	江	計
昭和45年	30	55	149	21	62	60	54	67	11	43	11	43	221	221	221	36.7
46	30	55	149	31	60	59	67	101	101	31	83	124	244	244	244	36.9
47	30	55	149	106	159	159	210	176	176	83	124	124	808	808	808	34.0
48	30	55	149	87	76	76	176	176	176	66	66	66	1,062	1,062	1,062	35.6
49	30	55	149	131	123	123	283	283	283	66	66	66	1,079	1,079	1,079	33.8
50	30	55	149	131	123	123	283	283	283	66	66	66	1,079	1,079	1,079	32.5
51	30	55	149	131	123	123	283	283	283	66	66	66	1,079	1,079	1,079	31.6

(資料) 三春町民生課資料より作成。
 (注) カッコ内は受診者に対する高血圧者の比率(%)である。

第34表 農夫症得点調査

	受診者	(一)			(±)			(十)			計 (構成比)				
		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	(一)	(±)	(十)
沢石地区 (昭48.9)	男	11	3	1	2	4	4	3	1	2			65(4.5)	4(36.4)	1(0.1)
	女	34	2	4	8	4	7	2	3	2			14(41.2)	16(47.0)	4(11.8)
狐田地区 (昭48.11)	男	47	4	21	6	8	6	1	5	1	1		31(66.0)	16(34.0)	0
	女	87	10	17	20	12	12	9	1	1	1		47(54.0)	38(43.7)	2(2.3)
中善地区 (昭49.3)	男	54	15	10	13	9	3	2	2	1	3		38(70.4)	15(27.8)	1(1.8)
	女	91	13	21	17	20	10	3	2	2	1		51(56.0)	37(40.7)	3(3.3)
御木沢地区 (昭49.10)	男	77	13	19	22	10	8	1	1	1	1		54(70.1)	22(28.6)	1(1.3)
	女	116	10	22	28	28	16	1	1	1	1		60(51.7)	53(45.7)	3(2.6)
中善地区 (昭50.2)	男	42	7	13	3	11	5	3	3	2			23(54.8)	19(45.2)	0
	女	64	7	12	17	13	6	6	3	3	2		36(56.3)	26(40.6)	2(3.1)
御木沢地区 (昭50.4)	男	33	8	8	7	4	3	2	2	1	1		23(69.7)	9(27.3)	1(3.0)
	女	39	6	9	10	6	5	3	3	1	1		25(64.1)	14(35.9)	
三春地区 (昭51.2)	男	48	9	13	10	7	5	4	4	7	1		32(66.7)	16(33.3)	0
	女	106	14	23	25	16	14	7	7	1	1		62(58.5)	42(39.6)	2(1.9)
三春地区 (昭51.10)	男	55	13	12	16	7	6	1	1	2			41(74.5)	14(25.5)	0
	女	99	17	21	21	20	9	9	7	2	2		59(59.6)	38(38.4)	2(2.0)
三春地区 (昭52.10)	男	43	14	9	10	5	4	1	1	4			33(76.7)	10(23.3)	0
	女	77	8	12	25	20	7	4	4	3	1		45(58.4)	32(41.6)	0
合計	男	410	86	106	89	65	40	16	4	3	1		281	125	4
	女	713	87	141	171	139	86	43	28	10	6		399	296	18
比率	男	100.0	21.0	25.9	21.7	15.9	9.8	3.9	1.0	0.7	0.2		(68.5)	(30.5)	(1.0)
	女	100.0	12.2	19.8	24.0	19.5	12.1	6.0	3.9	1.4	0.9		(56.0)	(41.5)	(2.5)

(資料) 福島県原生農業協同組合連合会・農村医学研究所資料より作成。

(注) 「構成比」は(一)+(±)+(十)=100.0となる。

第35表 年齢階層別患者点数調査

年齢	受診者	(一)										(十)										計		構成比				
		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	(一)	(十)	(一)	(十)		
20~29	男	0	1	1	9	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	2(100.0)	0	0	0	0
	女	2																					0	0	0	0	0	0
30~39	男	59	21	13	10	18	4	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	44(74.6)	14(23.7)	48(40.3)	4(3.4)	1(1.7)	4(3.4)	
	女	119	15	26	26	21	18	12	7	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	67(56.3)	48(40.3)	48(40.3)	4(3.4)	4(3.4)	4(3.4)	
40~49	男	141	36	39	28	15	12	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	103(73.1)	36(25.5)	94(35.5)	2(1.4)	2(1.4)	5(1.9)	
	女	265	41	56	69	51	22	16	5	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	166(62.6)	94(35.5)	94(35.5)	5(1.9)	5(1.9)	5(1.9)	
50~59	男	127	24	36	28	12	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	88(69.3)	38(29.9)	38(29.9)	1(0.8)	1(0.8)	9(4.5)	
	女	199	17	41	39	20	12	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	47(48.8)	93(46.7)	93(46.7)	9(4.5)	9(4.5)	9(4.5)	
60~69	男	65	4	15	19	8	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	38(58.5)	27(41.5)	51(48.6)	0	0	0	
	女	105	11	13	30	12	12	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	54(51.4)	51(48.6)	51(48.6)	0	0	0	
70~	男	18	1	3	4	4	1															8(44.4)	10(55.6)	12(52.2)	0	0	0	
	女	23	2	3	6	5	1																11(47.8)	12(52.2)	12(52.2)	0	0	0
合計	男	410	86	106	89	40	16	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	281(68.5)	125(30.5)	296(41.5)	4(1.0)	4(1.0)	18(2.5)	
	女	713	87	141	171	139	86	43	28	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	399(56.0)	296(41.5)	296(41.5)	18(2.5)	18(2.5)	18(2.5)	

(資料) (注) とともに第34表に同じ。

四 医療・保健の供給体制と行政

これまでの人口動態、死亡動向、疾病動向に関するささやかな考察を通じて、三春町における住民自身の側の健康問題が少しは明らかにされたかもしれない。そこで本節では、こうした実態にたいする関係機関の側の問題をさぐることにしよう。

周知のように、三春町はかつての田村郡都であり、また今日でも、田村地方の行政機関所在地として、保健所、農業改良普及所、県立病院といった諸機関、諸施設を手近かに利用しうる地元の利を得ている。しかし同時に、郡山市の急速な発展の結果として、田村郡の西北部および南西部がこれに吸収されて、三春町自身が残存田村郡の北西端に偏して位置するようになり、しかも近年の岩江地区に典型的にみられるように、郡山市勢の諸影響がますます広く町内に及びつつあるなかで、医療・保健問題での対郡山依存の実態が着実に進行しているといえよう。そして、以上のような二面的な状況は三春町をして田村郡内の他の町村と区別せしめる特徴ともなっている。

そこで、第36表は三春町、田村郡内各町村および郡山市について、医療機関従事者数をみたものである。これによると、田村郡内では一般に三春町と小野町で高い数値がよみとれる。これは三春町における県立三春病院の存在と、郡山市やいわき市(平)からかなりの距離にある小野町での公立小野町地方総合病院の存在に、主として起因するものである。そのことは第37表にみる医療施設病床数にも現われている。また、医療施設数については第38表のとおりであり、いずれにしても数字のうえでは、三春町は相対的に恵まれているということになる。

とはいへ、三春町における医療施設が町民の医療需要に応えきれないこともまた事実である。すなわち、第39表は三春町における医療機関と診療科目であり、内科、外科、小児科、産婦人科をはじめとして、一応の診療科目はそろっている。しかし、国保関係資料によって受診状況をみるかぎりでは、町民(国保被加入者)の利用する医療機関のうち、大まかにみて八〇%が郡山市内、一〇%が三春町内、その他が一〇%となっており、また、町内では県立三春病院とその他の個人経営医療機関の利用割合がほぼ半ばしている。

したがって、ここでの問題点は、第一に、三春町における医療機関が全て三春地区に集中しており、とくに南部にあっては郡山市が、北部にとっては船引町が最寄りの医療機関所在地となっていること、第二に、県立病院が医師確保の困

第36表 医療関係従事者数

(昭和50年12月末現在)

	医師	歯科医師	薬剤師	診療X線技師	保健婦	助産婦	看護婦	歯科衛生士	歯科技師	栄養士	あんま・灸師	柔道整復師	医行業為類似者	人口計 (50.10.1)	人口1,000人あたり							
															医師	歯医科師	薬剤師	保健婦	助産婦	看護婦	総事従者	
三春町	14	6	9	1	9	8	42			6	11	4	1	111	0.74	0.32	0.48	0.48	0.42	2.23	5.89	
小野町	16	5	5	1	2	9	10			3	6	3		60	1.10	0.34	0.34	0.14	0.62	0.69	4.13	
滝根町	2	2	3	0	1	1	1			0	3			12	5.704	0.35	0.35	0.53	0.18	0.18	2.10	
大越町	3	0	1	0	0	1	8		1	0	2			16	7.217	0.42	0	0.14	0	0.14	1.11	2.22
都路村	1	0	0	0	1		2			0	0			4	4,092	0.24	0	0.24		0.49	0.98	
常葉町	2	1	1	0	0	5	7			0	4			20	7,644	0.26	0.13	0.13	0	0.65	0.92	2.62
船引町	13	4	3	0	5	11	18		1	2	10	3	1	71	25,271	0.51	0.16	0.12	0.20	0.44	0.71	2.81
小計	51	18	22	2	18	34	88	0	2	11	34	10	2	294	83,309	0.61	0.22	0.26	0.22	0.41	1.06	3.55
郡山市	269	111	215		44	89	508	50						264,610	1.02	0.42	0.81	0.17	0.34	1.92		

(資料) 田村郡関係分は三春保健所『業務報告1976』21ページより作成。

郡山市関係分は福島県厚生部『厚生行政の概況(衛生編)』第25巻(昭和51年版)192～196ページより作成。

(注) ①上記2資料の関連重複部分の数値には若干の不一致がみられるが、それぞれの出典にしたがって引用した。

②県立三春病院(内・外・小・産・耳)……医師5, 薬剤師2, X線技師1, 助産婦4, 看護婦29, 検査技師1

公立小野町地方総合病院(内・外・小・産・眼・耳・整)……医師8, 薬剤師1, X線技師1, 助産婦2, 看護婦39, 検査技師2

——小野町・滝根町・大越町・いわき市(川前町・三和町)・平田村・川内村による組合経営。

第37表 医療施設病床数 (昭和50年12月末現在)

	総数	病院病床数						一般歯科		人口 (50.10.1)	1,000人 あたり 病床数
		総数	精神	伝染	結核	らい	その他	診療所 病床数	診療所 病床数		
三春町	213	125	—	20	—	—	105	88	—	18,860	11.3
小野町	365	309	—	34	30	—	145	56	—	14,520	25.1
滝根町	5	—	—	—	—	—	—	5	—	5,704	0.9
大越町	19	—	—	—	—	—	—	19	—	7,217	2.6
都路村	6	—	—	—	—	—	—	6	—	4,092	1.5
常葉町	38	—	—	—	—	—	—	38	—	7,644	5.0
船引町	114	70	—	—	—	—	70	44	—	25,271	4.1
小計	760	504	—	54	30	—	420	256	—	83,309	9.1
郡山市	5,456	4,370	1,460	20	228	—	2,662	1,086	—	264,610	20.6

(資料) 福島県厚生部『厚生行政の概況(衛生編)』第25巻187ページより作成。

(注) 病院病床数内訳

三春町…県立三春病院120(52年3月より一般100,伝染病20),宗方病院30(一般)

小野町…公立小野町地方総合病院224(一般160,結核30,伝染病34),石塚病院85(一般)

船引町…大方病院40(一般),秋元病院30(一般)

—三春町における医療・保健問題—

第38表 医療施設数 (昭和50年12月末現在)

	病院							一般診療所				歯科診療所			薬局
	総 数	精 神 病 院	結 核 療 養 所	一 般 病 院	総 合 病 院	救 急 病 院	休 止	総 数	無 施 床 設	有 施 床 設	休 止	総 数	無 施 床 設	休 止	
三春町	2	—	—	2	—	—	—	11	4	7	—	4	4	—	3
小野町	2	—	—	2	1	—	—	6	1	5	—	4	4	—	2
滝根町	—	—	—	—	—	—	—	2	1	1	—	1	1	—	2
大越町	—	—	—	—	—	—	—	3	2	1	1	1	1	—	—
都路村	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—
常葉町	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2	—	1	1	—	1
船引町	2	—	—	2	—	—	—	6	3	3	—	4	4	—	1
小計	6	—	—	6	1	—	—	31	11	20	1	15	15	—	9
郡山市	22	3	—	19	4	7	—	146	62	84	2	56	56	1	42

(資料) 福島県厚生部『厚生行政の概況(衛生編)』第25巻187ページ。

(注) ①「薬局」は医療施設ではないが参考までに掲げた。

(薬局数の出所—田村郡関係分は三春保健所『業務概要1676』22ページ。

郡山市関係分は福島県厚生部,上掲書165ページ。同所で田村郡10とある)。

②「総合病院」「急救病院」「休止」は再掲分のため、「総数」には加算されない。

第39表 医療機関および診療科目（三春町）

（昭和52.4.1現在）

		診 療 科 目
病院	県立三春病院	内科, 外科 (週3回), 小児科 (週2回), 産婦人科, 耳鼻咽喉科
	宗像病院	内科, 外科, 産婦人科
医 院	春山医院	内科, 小児科, 理学診療科, 放射線科
	遠藤整形外科医院	内科, 外科, 眼科
	石川医院	内科, 小児科
	陣内医院	内科, 小児科
	矢吹医院	内科, 外科, 小児科
	西山外科医院	内科, 外科, 小児科, 消化器科, 肛門科
	根本医院	内科, 小児科
	星外科胃腸科医院	内科, 外科, 呼吸器科, 消化器科
歯 科 医 院	新町医院	内科, 小児科, 呼吸器科, 胃腸科, 循環器科, 放射線科
	本田歯科医院	歯科
	小山歯科医院	歯科
	佐藤歯科医院	歯科
	歯科佐藤医院	歯科

（資料）三春町民生課資料による。

難などによって町民の医療需要に十分応えきれていないこと（半日診療、隔日診療など）、第三に、したがって「軽い病気は三春の病院で治療し、面倒な病気は郡山の病院に行く」という町民の側での選択的対応が半ば常識化していること、第四に、夜間・救急医療については、個別医師との個人的コネクションに頼るか、あるいは郡山消防署三春分署の救急車による郡山市内への搬送に依存し、町内的な救急医療体制を事実上欠いていること、などである。これらの問題は、基本的には、三春町が郡山市に比較的近く、また、モータリゼーションの発達によって、買い物や通学などの目的をも兼ねた郡山市内への「医者通い」がともかく

第40表 月別救急出動件数 (昭和49.4～53.12)

年	月												計	月間平均
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
昭和49年	—	—	—	3	13	11	10	13	10	19	10	8	97	10.78
50	17	13	14	13	15	10	16	16	16	11	11	19	171	14.26
51	15	8	10	23	9	6	12	22	9	19	9	17	159	13.25
52	15	17	29	13	12	16	23	20	18	17	24	19	223	18.58
53	22	16	22	19	30	18	23	26	15	16	20	23	250	20.83
月間平均	17.25	13.5	18.75	16.2	15.8	12.2	16.8	19.4	13.6	16.4	14.8	17.2		15.79

(資料) 郡山消防署三春分署資料より作成。

(注) 「月間平均」は1月あたりの出動件数である。

第41表 原因別出動件数 (昭和49.4～53.12)

年次	原因別出動件数												計
	火災	自然災害	水難	交通事故	労働災害	運動事故	一般負傷	加害	自損行為	急病	転院搬送	その他	
昭和49年													97
50			1	30	1	2	13	2	3	48	—	4	171
51				40	4	1	26	1	4	93	0	16	159
52				38	2	1	28	1	2	71	15	105	223
53	3			49	9	5	29	2	2	105	19	19	250
53	1			38	5	5	38	1	2	138		3	250
月間平均	0.07		0.02	3.42	0.37	0.25	2.35	0.11	0.23	7.98	1.04	0.12	15.79

(資料) 第40表に同じ。

(注) ① 「その他」には「医師搬送」(52年, 53年各1) がよくまれる。

② 「月間平均」は原則として57カ月(昭和49.4～53.12)平均であるが、転院搬送については50年1月より新設された項目のため48カ月(昭和50.1～53.12)平均として算出した。

も口絶せざる
 のこと探るの
 ことである。
 その中で、県
 立三春病院の
 ことについて言
 ねば、昭和二
 六年二月の開
 設以来、当初
 はこの地域に
 特有な高乳児
 死亡率に對処
 する母子医療
 センターとし
 上の役割が意
 識され、また、
 乳児死亡率が
 低下した現在

では、老人医療センターとしての役割（たとえば三春町には七〇才以上者が約一、五〇〇人おり、そのうち要入院者は約三〇%にのぼると病院側では推定している）が意識されている。しかし、一方では、人件費や諸経費が増加するなかでの収入減という経営困難が進行し、他方では、たとえば内科医師一人が外来患者六、七〇人と入院患者三〇人を二四時間拘束で措置しなければならぬというえ、さらに「給料が安い」「稼働還元がない」「将来性がない」等々の理由から生ずる医師確保の困難が深刻化しつつある。かくして三春病院は、他の県立病院と同様に悪循環的な危機に悩まされている。

また、救急体制の実際を示すものとして、郡山消防署三春分署による救急車（一台配備）の出動記録を整理してみた。第40表によって救急出動件数をみると、月ごとの傾向は必ずしも明らかではないが、全体として出動件数の増加傾向がうかがえる。そして、これを出動原因別にみたのが第41表であるが、ここでは急病が全体の半分、交通事故が五分の一強、一般負傷が七分の一程度をしめ、これらが主要な出動原因となっていることがわかる。さらに、この三大出動原因をよりくわしくみたのが第42表である。月ごとの平均値についてはともかくとして、年次的な傾向としては、交通事故による出動は停滞的であり、一般負傷および急病による出動件数については明らかに増加の傾向にあることがわかる。

ここでは、さらに、第41表にみる転院搬送が毎月一件以上記録されていることについて言及する必要がある。すなわち、この意味するところは、一旦患者を収容した病院がその任にたえられず、病院側の判断と要請によって患者を再び送り出すということであり、救急体制、医療体制の弱さを示す指標の一つともいえる。しかし、これは事態を全面的に明示しているものではない。つまり、救急隊の判断で、「軽症者は三春へ、重症者は郡山へ」という選択的措置によって、重症者、中等症者については最初から郡山市内に直行したうえでの、比較的軽症者を収容した町内病院からの転院搬送をこの記録は示しているにすぎないからである。また、夜間や休日については、県立三春病院の当直医師がたまたまその症状の担当医である場合をのぞいて、町内での収容は不可能である。したがって、平日日中出動の三分の二と夜間・休日

動のほとんどが郡山方面への搬送となっており、こうした搬送の場合、一回につき約二時間の出勤時間を要している。かくして、このような救急出勤の記録は、町内的な救急医療体制の非常な弱さと、この面での郡山市への依存の大きさをを証明するものとなっている。いずれにせよ、地方の小規模自治体が救急医療体制を独自に確立することに限界がある以上、

第42表 主要原因別・月別救急出勤件数

(昭和49.4～53.12)

年 月	交 通 事 故					一 般 負 傷					急 病										
	49	50	51	52	53	計	平均	49	50	51	52	53	計	平均	49	50	51	52	53	計	平均
1	—	3	4	2	1	10	2.5	—	1	3	3	5	12	3.0	—	11	7	8	10	36	9.0
2	—	2	1	3	2	8	2.0	—	0	1	0	5	6	1.5	—	11	4	8	7	30	7.5
3	—	3	0	8	1	12	3.0	—	3	1	3	6	13	3.25	—	7	6	14	10	37	9.25
4	0	2	7	3	3	15	3.0	0	4	2	4	1	11	2.2	2	6	10	3	13	34	6.8
5	4	1	3	0	7	15	3.0	0	4	0	2	2	7	1.4	9	9	3	8	16	45	9.0
6	2	5	2	5	3	17	3.4	4	0	0	1	6	11	2.2	5	2	3	10	7	27	5.4
7	4	3	4	7	5	23	4.6	3	1	2	4	2	12	2.4	3	12	5	9	14	43	8.6
8	2	5	5	5	6	23	4.6	0	4	6	3	3	16	3.2	9	7	7	11	13	47	9.4
9	3	3	3	4	1	14	2.8	0	2	2	0	1	5	1.0	6	9	4	7	10	36	7.2
10	6	5	5	4	2	22	4.4	4	2	4	2	2	15	3.0	7	4	9	7	10	37	7.4
11	6	3	0	3	2	14	2.8	1	3	3	6	1	14	2.8	3	5	4	10	15	37	7.4
12	3	5	4	5	5	22	4.4	1	2	4	1	4	12	2.4	4	10	9	10	13	46	9.2
計	30	40	38	49	38	193	3.39	13	26	28	29	38	134	2.35	48	93	71	105	138	455	7.98
平均	3.33	3.33	3.17	4.08	3.17	3.39		1.44	2.17	2.33	2.42	3.17	2.35		5.33	7.75	5.92	8.75	11.5	7.98	

(資料) (注) とともに第40表に同じ。

第43表 年度中央人口の比較

(毎年10月1日現在)

年	福島県		田村郡		三春町	
	人口	指数	人口	指数	人口	指数
昭和35	2,051,137	103.4	98,746	104.5	22,119	103.9
36	2,035,556	102.6	98,185	103.9	21,972	103.2
37	2,019,360	101.8	97,105	102.9	21,619	101.5
38	2,009,938	101.3	96,627	102.3	21,763	102.2
39	2,002,449	100.9	95,554	101.2	21,489	100.9
40	1,983,754	100.0	94,456	100.0	21,292	100.0
41	1,971,726	99.4	93,014	98.5	21,057	98.9
42	1,967,153	99.2	92,032	97.4	20,795	97.7
43	1,959,481	98.8	90,767	96.1	20,456	96.1
44	1,954,377	98.5	89,513	94.8	20,140	94.6
45	1,946,077	98.1	88,322	93.5	19,898	93.4
46	1,940,399	97.8	87,131	92.5	19,555	91.8
47	1,938,768	97.7	85,891	90.9	19,144	89.9
48	1,943,060	97.9	84,827	89.8	18,924	88.9
49	1,952,879	98.4	84,172	89.1	18,866	88.6
50	1,970,616	99.3	83,299	88.2	18,859	88.6
51	1,983,560	100.0	83,133	88.0	18,903	88.8
52	1,996,674	100.7	82,713	87.6	18,984	89.2
53	2,008,012	101.2	82,409	87.2	18,959	89.0

(資料) 昭和52年までは福島県企画調整部『福島県の人口』(昭和52年版), 昭和53年は同前(月報)より作成。

(注) 昭和38年三春町の人口増加は同年9月一部要田地区の編入(船引町より)による。

国や県による公的医療体制の抜本的な拡充をはかるとともに、そのうえで民間の医師・医療機関との有機的な連関をはか
 っていくことが必要とされるであろう。
 次に、自治体が把握する国民健康保険(国保)について、主に医療費の視点から検討してみよう。第43表は比較のため
 のひとつの基礎数値として年度中央人口(一〇月一日現在人口)をみたものである。これによると、福島県の人口は四七
 年段階で下げ止まりとなり、五一年には四〇
 年の水準に回復している。これにたいして、
 田村郡では依然として人口減少傾向がつづい
 ており、三春町については五〇年には下げ止
 まり、その後は増加に転じている。
 そして、第44表は国保の被保険者数に関す
 る比較である。これを見ると、福島県、田村
 郡、三春町のいずれの段階でも絶対的な減少
 が進行していることがわかるが、被保険者数
 の減少割合(表中の指数の比較)では郡V町
 V県となっており、つまりは人口減少率の大
 きさと相関関係にあることがわかる。また、
 国保の加入率をみると、四〇年段階では県が
 約六〇%、郡が七五%、町が六三%の水準に

第44表 国保の被保険者数と加入率の比較

年度	福 島 県			田 村 郡			三 春 町		
	被保険者数	指数	加入率	被保険者数	指数	加入率	被保険者数	指数	加入率
昭和36	1,322,640	112.1	65.0	77,263	108.7	78.7	14,843	109.9	67.6
37	1,285,550	109.0	63.7	76,109	107.1	78.4	14,534	107.6	67.2
38	1,253,516	106.3	62.4	74,289	104.5	76.9	14,228	105.3	65.4
39	1,211,473	102.7	60.5	72,638	102.2	76.0	13,826	102.4	64.3
40	1,179,745	100.0	59.5	71,063	100.0	75.2	13,507	100.0	63.4
41	1,156,709	98.0	58.7	69,847	98.3	75.1	13,277	98.3	62.8
42	1,139,170	96.6	57.9	68,420	96.3	74.3	12,976	96.1	62.4
43	1,117,701	94.7	57.0	66,766	94.0	73.6	12,793	94.7	62.5
44	1,094,766	92.8	56.0	65,009	91.5	72.6	12,560	93.0	62.4
45	1,063,558	90.2	54.7	62,842	88.4	71.2	12,141	89.9	61.0
46	1,042,449	88.4	53.7	61,216	86.1	70.3	11,847	87.7	61.2
47	1,022,970	86.7	52.8	59,749	84.1	69.6	11,554	85.5	60.4
48	995,124	84.4	51.2	57,820	81.4	68.2	11,201	82.9	59.2
49	964,366	81.7	49.4	55,598	78.2	66.1	10,758	79.6	57.0
50	956,772	81.1	48.2	55,014	77.4	66.0	10,650	78.8	56.5
51	950,398	80.6	47.9	54,296	76.4	65.3	10,469	77.5	55.4
52	942,143	79.9	47.2	53,626	75.5	64.8	10,414	77.1	54.9

—三春町における医療・保健問題—

(資料) 福島県厚生部『国民健康保険事業状況』(各年版)より作成。

(注) ①「被保険者数」は年間平均数(毎月未被保険者数の平均数)である。ただし、36、37年については他の関係数値から推算(受診件数÷受診率)したが、別の数値による計算結果とは異なるので、この2カ年の数値についての信頼度は高くない。そして、この影響は次表以下に及ぶ。

②「加入率」は毎年10月1日人口(第43表)にたいする被保険者数の割合(%)をもってあてた。

あったのが、全体として着実に低下傾向にある。しかし低下の程度は県V郡V町という序列になっており、絶対数の減少とは逆になっている。これはつまり、県段階では人口数の回復傾向と被保険者数の減少傾向との相乗効果によって加入率の減少幅が大きくなり、郡段階では人口減少と被保険者の減少とが相殺効果をもって、加入率の減少幅を小さくしているからであろうし、三春町についても同様のことから説明しうるであろう。ともあれ、加入率における郡V町V県という序列は、各々の段階での人口の職業構成を反映しており、おそらくは農家のしめる比重にもっとも大きく依存しているであろう。そして、以上のような被保険者数の減少傾向は、国保経営を困難にする重要な要因となっている。

次に、第45表は被保険者一〇万人あたり受診率の比較である。全体としては、逐次受診

第45表 10万人あたり受診率の比較

年度	福 島 県			田 村 郡			三 春 町			順位
	受診率	指数	対比	受診率	指数	対比	受診率	指数	対比	
昭和36	217,120	77.3	100.0	193,514	78.0	89.1	195,863	76.7	90.2	58
37	224,880	80.0	100.0	200,767	80.9	89.3	204,596	80.1	91.0	69
38	237,273	84.4	100.0	200,308	80.7	84.4	205,728	80.5	86.7	78
39	269,690	96.0	100.0	223,138	89.9	82.7	226,985	88.9	84.2	84
40	281,010	100.0	100.0	248,118	100.0	88.3	255,460	100.0	90.9	61
41	307,802	109.5	100.0	261,546	105.4	85.0	257,031	100.6	83.5	71
42	341,887	121.7	100.0	281,238	113.3	82.3	282,583	110.6	82.7	69
43	368,826	131.3	100.0	300,310	121.0	81.4	311,162	122.0	84.4	70
44	390,052	138.8	100.0	319,647	128.8	81.9	324,674	127.1	83.2	72
45	405,690	144.4	100.0	332,532	134.0	82.0	338,984	132.7	83.6	72
46	430,882	153.3	100.0	356,930	143.9	82.8	370,752	145.1	86.0	70
47	455,623	162.1	100.0	380,261	153.3	83.5	391,916	153.4	86.0	69
48	489,154	174.1	100.0	418,298	168.6	85.5	442,184	173.1	90.4	64
49	503,276	179.1	100.0	423,483	170.7	84.1	451,125	176.6	89.6	64
50	516,931	184.0	100.0	441,998	178.1	85.5	475,164	186.0	91.9	65
51	536,581	190.9	100.0	457,548	184.4	85.3	485,137	189.9	90.4	70
52	550,325	195.8	100.0	471,208	189.9	85.6	492,164	192.7	89.4	72

(資料) 第44表に同じ。

(注) ①「受診率」は年間平均被保険者数10万人あたりの受診件数である。

②「(三春町) 順位」は県内市町村(39年まで120,40~41年109, 42~43年92, 44年以降90)中における三春町受診率の順位を示す。

率を高めてはいるが、受診率における県V町V郡という序列は変わっていない。これは住民の意識の向上、医師・医療機関の年々の増加や道路の改良などによる医療機関利用上の改善、老人医療費等々での公費負担の拡大によって、住民の受診機会が増大していることの結果と思われるが、同時に、田村郡における受診率の低さについては、その他の阿武隈山系地域や会津の山間地域と同様に、医療機関利用上の地理的な制約によるものと思われる。つまりは僻地医療が問われる所以のひとつであろう。また、この受診率における三春町の県内順位は、つねに低位に推移している。つまり、三春町の住民、とくに農家にとって、その農繁期の連続性による過労と疾病の現実的可能性にもかかわらず、実際に受診するための時間的・物理的条件の不十分さがこの数値に示されているといえよう。

第46表 1人あたり療養諸費の比較

年度	福 島 県			田 村 郡			三 春 町			順位
	費用額	指数	対比	費用額	指数	対比	費用額	指数	対比	
昭和36	2,841	46.2	100.0	2,647	45.1	94.1	2,932	46.6	104.2	31
37	3,297	53.7	100.0	3,060	52.1	92.8	3,295	52.4	99.9	42
38	3,981	64.8	100.0	3,542	60.4	89.0	3,882	61.8	97.5	48
39	5,046	82.1	100.0	3,269	55.7	64.8	4,867	77.4	96.4	50
40	6,144	100.0	100.0	5,868	100.0	95.5	6,286	100.0	102.3	32
41	7,510	122.2	100.0	6,922	118.0	92.2	7,249	115.3	96.5	44
42	9,228	150.2	100.0	8,296	141.4	89.9	8,647	137.6	93.7	42
43	11,242	183.0	100.0	9,713	165.5	86.4	10,943	174.1	97.3	27
44	13,235	215.4	100.0	11,390	194.1	86.1	12,223	194.4	92.4	38
45	16,050	261.2	100.0	14,376	245.0	89.6	15,749	250.5	98.1	29
46	18,409	299.6	100.0	16,230	276.6	88.2	17,930	285.2	97.4	31
47	23,399	380.8	100.0	20,074	342.1	85.8	22,196	353.1	94.9	34
48	28,130	457.8	100.0	24,141	411.4	85.8	26,930	428.1	95.7	38
49	39,567	644.0	100.0	33,495	570.8	84.7	36,544	581.4	92.4	30
50	47,605	774.8	100.0	40,946	697.8	86.0	46,340	737.2	97.3	36
51	57,356	933.5	100.0	49,032	835.6	85.5	54,834	872.3	95.6	40
52	65,799	1,070.9	100.0	56,331	957.0	85.6	65,647	1,044.3	99.8	32

―三春町における医療・保健問題―

(資料) 第44表に同じ。

(注) ①「(1人あたり)費用額」は療養諸費合計額÷年間平均被保険者数である。

さらに第46表は一人あたり療養諸費の比較である。一般的にいえば一人あたり受診率が一人あたりの療養諸費に相関しうるはずであり、ここでも県V町V郡の序列が現われている。しかし、とくに三春町については、受診率の低さほどに療養諸費が低くはないことが、「対比」や「順位」の比較からよみとれる。これは一件あたりの費用額(および一件あたりの日数)では相対的に高いことを意味しており、受診者の疾病の程度がそれだけ重いことになる。

そこで第47表によって一件あたりの費用額を比較してみた。ここでは県、郡、町の序列が逆転している。つまり、三春町は受診率が低く、したがって一人あたりの療養諸費も低いが、一件あたりでは非常に高いことが明らかとなる。これは、仕事の都合や適当な医療機関が手近かでないことのために、病気が悪化してはじめて受診するということであろうか。また、この点で田村郡が三春町よりも低位に推移していることの原因は、たとえば、山間地域としての医療機関利用上の

第47表 1件あたり費用額の比較

年度	福 島 県			田 村 郡			三 暮 町			順位
	費用額	指数	対比	費用額	指数	対比	費用額	指数	対比	
昭和36	1,306	60.4	100.0	1,341	57.3	102.7	1,497	61.5	114.6	16
37	1,447	67.0	100.0	1,500	64.1	103.7	1,561	64.1	107.9	29
38	1,656	76.6	100.0	1,740	74.3	105.1	1,848	75.9	111.6	24
39	1,850	85.5	100.0	2,037	87.0	110.1	2,115	86.9	114.3	16
40	2,161	100.0	100.0	2,341	100.0	108.3	2,434	100.0	112.6	11
41	2,417	111.8	100.0	2,623	112.0	108.5	2,797	114.9	115.7	8
42	2,674	123.7	100.0	2,923	124.9	109.3	3,031	124.5	113.4	13
43	3,022	139.8	100.0	3,255	139.0	107.7	3,494	143.5	115.6	6
44	3,364	155.7	100.0	3,531	150.8	105.0	3,716	152.7	110.5	4
45	3,924	181.6	100.0	4,283	183.0	109.1	4,614	189.6	117.6	24
46	4,241	196.3	100.0	4,503	192.4	106.2	4,797	197.1	113.1	4
47	5,095	235.8	100.0	5,226	223.2	102.6	5,623	231.0	110.4	7
48	5,708	264.1	100.0	5,714	244.1	100.1	6,035	247.9	105.7	17
49	7,801	361.0	100.0	7,839	334.9	100.5	8,013	329.2	102.7	26
50	9,128	422.4	100.0	9,179	392.1	100.6	9,683	397.8	106.1	18
51	10,590	490.1	100.0	10,621	453.7	100.3	11,204	460.3	105.8	17
52	11,823	547.1	100.0	11,854	506.4	100.3	13,234	543.7	111.9	7

(資料) 第44表に同じ。

(注) 「(1件あたり)費用額」は診療費総額÷診療件数(受診件数)である。

第48表 1人あたり国保税収納額の比較

年度	福 島 県			田 村 郡			三 暮 町			順位
	収納額	指数	対比	収納額	指数	対比	収納額	指数	対比	
昭和36	862	45.2	100.0	770	38.9	89.3	942	40.1	109.3	26
37	962	50.4	100.0	827	41.7	86.0	1,016	43.2	105.6	24
38	1,036	54.3	100.0	954	48.2	92.1	1,197	50.9	115.5	14
39	1,394	73.1	100.0	1,354	68.3	97.1	1,702	72.4	122.1	9
40	1,908	100.0	100.0	1,981	100.0	103.8	2,352	100.0	123.3	12
41	2,388	125.2	100.0	2,211	111.6	92.6	2,411	102.5	101.0	29
42	2,893	151.6	100.0	2,697	136.1	93.2	2,896	123.1	100.1	29
43	3,400	178.2	100.0	3,161	159.6	93.0	3,790	161.1	111.5	17
44	3,988	209.0	100.0	3,644	183.9	91.4	4,063	172.7	101.9	32
45	4,905	257.1	100.0	3,701	186.8	75.5	5,185	220.5	105.7	23
46	5,895	309.0	100.0	5,683	286.9	96.4	7,215	306.8	122.4	6
47	6,757	354.1	100.0	6,223	314.1	92.1	7,445	316.5	110.2	15
48	8,090	424.0	100.0	6,987	352.7	86.4	8,799	374.1	108.8	19
49	10,581	554.6	100.0	8,907	449.6	84.2	9,385	399.0	88.7	54
50	12,647	662.8	100.0	10,277	518.8	81.3	10,240	435.4	81.0	71
51	16,024	839.8	100.0	13,479	680.4	84.1	12,664	538.4	79.0	53
52	19,316	1,012.4	100.0	18,033	910.3	93.4	20,230	860.1	104.7	20

(資料) 第44表に同じ。

(注) 「(1人あたり)収納額」は国保税収納額÷年間平均被保険者数である。

不便さ等から、完治以前に受診を打ち切ることが少なくない、ということなどによるであろうか。

ともあれ、この間の物価上昇等をも背景としつつ、受診率の上昇と一件あたり費用額の上昇の相乗効果として、一人あたり療養諸費の上昇はさらに急速となっており、その結果は、第48表にみるように、一人あたり保険税収納額の連年の上昇となっている。とりわけ三春町については、税額の伸び率は比較的低いにもかかわらず、絶対額では県平均を上回って推移してきている。これは第46表でみた一人あたり療養諸費に比べてもかなり高いことになるが、その結果、この間にかんりの基金繰越がみられるとともに、その取りくずしが近年の収納額の対県平均比での急低下を可能にしている。また、この間における一般財政からの繰入状況等も保険税の水準に影響する要因である。

次に、老人医療公費助成についてであるが、この制度は、全国的な住民要求の高まりによって、各自治体レベルで費用の一部を公費負担するという事実の普及（三春町においては昭和四七年四月より七〇才以上について実施）を背景として、昭和四八年一月から老人福祉法の一環として国が実施することになったものであり、同じく四九年一〇月から全面実施された高額療養費助成制度とともに、老人医療の拡大に大きく寄与（種々の制度的限界にもかかわらず）している。これらの制度の実際については、たとえば第9図の事例を参照されたい。

そこでまず、第49表によって老人医療費支給対象者数をみると、その伸び率と国保被保険者中の比率の両方において町V郡V県という序列にあることがわかる。第一節でみたように、「過疎」化地域ほど老年人口比率が高いという傾向がここでも確認されるであろう。

次に、第50表で老人医療費支給対象者一〇万人あたり受診率をみると、四七年度と四八年度以降との格差がはっきりしている。ただし、四七年度分には公費助成制度が全面実施された四八年一〜三月分をふくんでおり、その意味で、諸率の格差はここに示される以上に一層大きいはずである。そのうえで、この表からは、受診率については県、郡、町ともにほぼ同

第9図 高額医療（療養費）制度および老人医療無料化制度

(A) 高額医療（療養費）制度——1人の患者が、一医療機関で受けた1カ月の医療費（入・外別）の自己負担分が、39,000円（医療費総額130,000円）を超える場合、その超える分を保険で給付（現金給付）する。その費用負担区分例は次のとおりである。

昭和52年 10月分	国保の負担する分				自己負担分		
	7割給付分		高額療養費分				
保険者 いわき市	3,188,500円		1,327,500円		39,000円		
患者 昭和28年生 昭7和52年 7月入院	国の負担分	保険税	国の補助	保険税	(本人)		
	45%	25%	1/2	1/2			
病名 悪性リンパ腫	2,049,750円	1,138,750円	663,750円	663,750円	合計 4,555,000円		

(B) 老人医療無料化制度——70才以上（寝たきりの場合は65才以上）の老人が、医療を受けた場合、保険で給付される分以外の自己負担分を公費で負担し、無料とする。

昭和52年 12月分	国保の負担する分				公費で負担する分		
	7割給付分		高額療養費分		(自己負担相当分)		
保険者 柳津町	658,126円		243,054円		39,000円		
患者 明治29年生 昭52年8月より入院	国の負担分	保険税	国の補助	保険税	国	県	市町村
	45%	25%	1/2	1/2	2/3	1/6	1/6
病名 肺癌	423,081円	235,045円	121,527円	121,527円	26,000	6,500	6,500
	合計				940,180円		

(資料) 福島県国保連合会資料による。

じ傾向を示していること、町や郡の受診率は県平均よりもかなり低く、全県的にみて低位置にあること（ここでも医療機関利用上の難易度が反映している）、公費助成制度の全面実施後は老人の受診率が一般受診率の二倍以上になってきていること、などがわらう。

そして、第51表はこれを一人あたり診療費についてみたものである。県、郡、町の相对比较については前表とほぼ同様なことはいえるが、ここでは費用額の伸び率が

受診率よりも急速であること（とくに三春町について）、また、一般の平均診療費の三倍以上を要していることがよみとれる。

さらに、一件あたり費用額の比較をみたのが第52表である。ここでも第47表と同様に、三春町は県平均を上回っており、とくに三春町での伸び率（指数）の高さが目立っている。しかし、国保全体の一件あたり費用額との比較では、県、郡、町ともほぼ同様の割合となっている。

そこで最後に、国保全体にしろる老人医療費関係の比重をみたのが第53表である。もともと老人は肉体的弱者であり、その意味では、老人比以上に件数比が高い（全体的にほぼ二倍強となっている）こと、また、同じ理由によって一層高い割合の療養経費を要する（全体の四分の一ないし三〇%となっている）ことは当然であろう。したがって、対象者比率の高い三春町が件数比率でも療養諸費比率でも一層高くなることは、その限りでは明らかである。

ともあれ、国保を中心とした自治体の医療対策については、全国的に有名なとなった岩手県沢内村の例をまつまでもなく、福島県内でも南会津郡檜枝岐村のように、村営診療所の設置（施設の一階が診療所、二階が役場）による定期検診の実施によって、高受診率のもとでの低医療費を実現している事例が特筆されるべきである。これらの例はいずれも予防医療の立場にたつもの

第49表 老人医療費支給対象者の比較

年度	福 島 県			田 村 郡			三 春 町		
	対象者	指数	比率	対象者	指数	比率	対象者	指数	比率
昭和47	72,814	98.6	7.1	4,074	98.7	6.8	909	96.3	7.9
48	73,817	100.0	7.4	4,127	100.0	7.1	944	100.0	8.4
49	75,032	101.6	7.8	4,214	102.1	7.6	997	105.6	9.3
50	75,980	102.9	7.9	4,355	105.5	7.9	1,004	106.4	10.6
51	76,818	104.1	8.1	4,412	106.9	8.1	1,021	108.2	9.8
52	79,632	107.9	8.5	4,512	109.3	8.4	1,046	110.8	10.0

（資料）福島県厚生部『国民健康保険事業状況』（各年版）より作成。

（注）①「対象者」は年間平均数（各月末数の平均数）である。

②「比率」は国被年間平均被保険者中にしめる比率（%）である。

③51年度三春町の対象者数は三春町国保事業状況報告書により、田村郡対象者数の集計もこの数によって集計した。

であり、若くは定率を定むべきである。また、医療保険制度の合理的再編成が必要なることも明らかである。

第50表 老人医療費支給対象者10万人あたり受診率

年度	福島県			田村郡			三春町			順位
	受診率	指数	対比	受診率	指数	対比	受診率	指数	対比	
昭和47	211,150	21.6	0.46	180,613	21.5	0.47	186,579	21.8	0.48	68
48	977,912	100.0	2.00	841,119	100.0	2.01	856,568	100.0	1.94	70
49	1,049,140	107.3	2.08	915,899	108.9	2.16	908,325	106.0	2.01	75
50	1,101,564	112.6	2.13	948,835	112.8	2.15	955,876	111.6	2.01	75
51	1,144,293	117.0	2.13	975,321	116.0	2.13	986,582	115.2	2.03	73
52	1,184,263	121.1	2.15	1,013,376	120.5	2.15	1,038,528	121.2	2.11	70

(資料) 第49表と同じ。

- (注) ① 「受診率」は年間平均対象者数10万人あたりの該当受診件数である。
 ② 「倍率」は国保全体の1人あたり受診率にたいする当該受診率の倍数である。
 ③ 「対比」は県平均を100とした場合の郡・町の割合である。
 ④ 「(三春町)順位」は県内90市町村中における三春町の受診率順位である。

第51表 老人医療費支給対象者1人あたり費用額

年度	福島県			田村郡			三春町			順位
	費用額	指数	対比	費用額	指数	対比	費用額	指数	対比	
昭和47	17,611	19.4	0.76	14,656	19.1	0.74	12,591	17.1	0.57	76
48	90,575	100.0	3.25	76,604	100.0	3.20	73,747	100.0	3.11	68
49	131,959	145.7	3.36	112,312	146.6	3.38	116,063	157.4	3.21	50
50	160,917	177.7	3.41	134,975	176.2	3.33	145,375	197.1	3.44	46
51	193,368	213.5	3.40	160,589	209.6	3.31	172,868	234.4	3.18	52
52	221,242	244.3	3.40	174,189	227.4	3.12	196,836	266.9	3.02	51

(資料) 第49表と同じ。

- (注) ① 「(1人あたり)費用額」は該当診療費合計額÷年間平均対象者数である。
 ② 「倍率」は国保全体の1人あたり診療費にたいする当該診療費の倍数である。
 ③ 「対比」「順位」については前表と同様である。

第52表 老人医療費支給対象者1件あたり費用額

年度	福島県				田村郡				三春町				
	費用額	指数	倍率	対比	費用額	指数	倍率	対比	費用額	指数	倍率	対比	順位
昭和47	8,341	90.1	1.64	100.0	8,112	89.1	1.55	97.3	6,748	78.4	1.20	80.9	70
48	9,262	100.0	1.62	100.0	9,107	100.0	1.59	98.3	8,610	100.0	1.43	93.0	50
49	12,577	135.8	1.61	100.0	12,262	134.6	1.56	97.5	12,778	148.4	1.59	101.6	36
50	14,068	151.9	1.54	100.0	14,291	156.9	1.56	101.6	15,209	176.4	1.57	108.1	29
51	16,896	182.4	1.60	100.0	16,462	180.8	1.55	97.4	17,522	203.5	1.56	103.7	27
52	18,682	201.7	1.58	100.0	17,191	188.8	1.45	92.0	18,953	220.1	1.43	101.5	35

(資料) 第49表に同じ。

(注) ①「(1件あたり)費用額」は該当診療費合計額÷該当診療件数である。

②「倍率」は国保全体の診療1件あたり費用額にたいする当該費用額の倍数である。

③「対比」「順位」は第50表と同趣旨である。

最後に、町当局および諸団体、諸機関による保健対策にふれなければならない。

まず、かつて重大であった高乳児死亡率への対策として、町当局も種々の施策を講じてきている。現在では三才児までの医療費および妊娠五カ月以上者の合併症について一〇割給付を実施している。また、乳児(四〜九カ月児)と妊婦(妊娠六カ月以降)や産婦(出産後三カ月まで)への栄養補給として、幼児には月四五〇グラム、妊産婦には月一キログラムの粉ミルクを支給している。その他、母子保健推進員や食生活改善推進員の制度をおき、全国的任意団体である母子愛育会の育成にも実績をあげている。また、三春保健所の活動と関連して、四六、四七年度には三春町が母子特別対策地区に指定され、その後もその体制を維持しつつ、妊婦の定期検診や栄養教室の開催などを通じて婦人の保健指導に力を注いでいる。

成人病対策としては、県保健衛生協会に委託する年一回の成人病検診について循環器系検診費の三分の一を町が負担

第53表 国保全体にしめる老人医療関係の比重

年度	福 島 県			田 村 郡			三 春 町		
	対象者	件 数	療養諸費	対象者	件 数	療養諸費	対象者	件 数	療養諸費
昭和47	7.1	3.3	5.4	6.8	3.2	5.0	7.9	3.7	4.5
48	7.4	14.8	24.0	7.1	14.4	22.8	8.4	16.3	23.1
49	7.8	16.2	26.0	7.6	16.4	25.5	9.3	18.7	29.6
50	7.9	16.9	27.0	7.9	16.9	26.2	10.6	19.0	29.7
51	8.1	17.2	27.4	8.1	17.3	26.7	9.8	19.8	30.9
52	8.5	18.2	28.7	8.4	18.1	26.1	10.0	21.2	30.2

(資料) 第49表に同じ。

- (注) ①「対象者」は年間平均被保険者中にしめる老人医療費支給対象者の割合(%)である。
 ②「件数」は国保全体の診療件数中にしめる該当老人診療件数の割合(%)である。
 ③「療養諸費」は国保全体の療養諸費合計額にしめる老人医療費支給対象者療養諸費合計額の割合(%)である。

し、心電図については町が二〇〇円、本人が三〇〇円を負担し、胃レントゲンについては町が七〇〇円、県が六〇〇円、本人が六〇〇円を負担することになっている。また、眼底検査(自己負担四〇〇円)は三春保健所によっている。しかし、こうした成人病検診の受診率は十分高いとはいえず、とくに零細事業従事者の検診もれがみられ、この対策として検診台帳づくりがすすめられている。さらに、町の成人病検診と事業所に義務づけられた検診の間に内容上のちがいがあり、この点での一元的対策が必要となっている。また、成人病対策としては厚生農協連と町内各農協との提携による検診と事後指導活動があり、そこで得られた農夫症に関する資料は前節にかかげた通りである。

次に、伝染病対策についてみると、三春町、船引町、常葉町、都路村四町村組合立による隔離病舎が昭和四九年に開設(管理は県立三春病院に委託)されている。この施設は二〇床を擁しているが、この間の利用状況は、五一年と五三年の疑似患者一名づつという状態であり、伝染病の大量発生は久しく記録されていない。これに関連して、水道普及率(すなわち町人口にたいする給水人口の比率)をみると四五・七%であり、県下第五四位となっている。なお、比較のために示せば、県全体の水道普及率は七四・五%であり、田村郡では三五・七%である(以上い

ずれも五一年末現在。福島県厚生部『厚生行政の概況（衛生編）』昭和五二年版一七六―一七七ページによる。また、環境衛生と安全対策をかねた御木沢農協による木戸前舗装推進運動が田村地方農業改良普及所を通じて他地区にも普及されつつあり、各農協を窓口とする各種の環境整備資金制度（住宅利用方式改善資金など）が導入されている。

その他、保健対策にかかわるものとしては、三春町民生課、三春保健所、田村地方農業改良普及所（在三春）生活改良普及員、厚生連農村医学研究所（白河市）、御木沢農協・三春農協の生活指導員などの公的・準公的な機関担当者があり、これらの間での提携・協力関係を強化するとともに、さらには農協婦人部、生活改善グループ、母子愛育会、母子保健推進員、老人クラブ等々を通じた保健活動（各種の講座や有線放送による生活改善、保健衛生の指導など）もすすめられている。また、三春町として保健婦確保のための奨学金制度を設けて、五三年度にはその適用者を得ているほか、県立三春病院のための医師住宅を提供し、研究費助成も行なっている。

なお、これまで言及してきたこととは別に、今後の対策強化がのぞまれる課題としては、さしあたり次の二点があげられる。すなわち、第一は老人対策であり、とくに百人をこえる寝たきり老人への対策が重要であろう。そして第二は毎年のように発生する自殺への対策、つまりは精神衛生上の施策である。

ともあれ、必ずしも医療・保健問題にかぎらず、社会的な諸活動がしかるべき成果をあげるためには、関係機関の積極的に適切な対策が重要であるとともに、住民自身の意識的な参加もまたより一層重要となっている。